
あなたとご飯と私

コリクー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あなたご飯と私

【Zコード】

Z2015S

【作者名】

コリクー

【あらすじ】

○しの片岡真由子はいつも優しく社交的に見えるけど、実はネガティブで昔の恋愛を忘れられなかつたりトラウマを抱える25歳。趣味は料理だがお菓子はあまり作れず。ある日子猫と成猫を拾うが実はその猫たちは・・・。異世界で溺愛されたり懐かれたりご飯を作つたり大変な日々。そして真由子に起こつた変化により周囲が変わってゆく・・・。たまにコメディ、たまにシリアスなんびり恋愛ファンタジー* R15です、ご注意ください

拾った子猫（前書き）

初めまして、「ワクワク」といいます（^ ^）

私の好きな猫と料理というものを組み合わせてみました。ちなみに恋愛ファンタジーです。なにぶん初めてなのでうまく書けるかドキドキしています。文字でのミスや読んでて違和感などありましたら

「ここが . . . 」と教えて下さい。

まだ色々と分かっていませんが精進します。スローペースな更新になってしまふかもしだれませんが頑張りますのでよろしくお願いします。楽しんでいただければ幸いです*

拾った子猫

「元気あにやあ、なつ」

ビニカで子猫が寂しそうに鳴いていて、私も一緒に泣きたくなつた、片岡真由子25歳の春。

今日は仕事ではミスをし帰宅する現在の時間は23時、最近は花粉症で鼻水がひどい、お気に入りの靴下に穴が開いていてショック、仕事が忙しくて食事をおろそかにしたため自慢の美乳がDからCカップになつた。これはオンナとしては大事件である！

そして・・・恋愛もつましくつてない。

「なあひ、ひにやあー」

3年前の大学時代に、少しだけ付き合つてた彼から連絡があつた。友達期間1年、交際期間3ヶ月。はたして付き合つていたのだろうか、と謎に思つひともある。

いや、付き合つてなければキスやあんなことこんなことしないはず・・・

今ではお互い友達で、そのメールは他愛ない内容だつたけど嬉しかつた。そして同時に、なんだか情けなくて悲しくなつた。

「みやうー、んにやあ」

今のような桜の季節に出会つて友達になり、焼き芋がおいしい冬に付き合い始め桜の季節に別れた。

まだ忘れられない。まるで私だけ時間が止まつてゐるみたい。

そいつには2年間付き合つてゐるかわいい彼女がいるのに、私はまだ進めてない。そいつが私のところに戻つてくると信じてゐるのだろうか。そんなことはない、だって私はかわいいつて感じじゃない。素直になれないは性分だからじょうがないんだ。

「んにゃうる

こつまでもその人のことだけはダメだと思つて他の人に目を向けてけど、どうしても恋愛感情はあまりわからなかつた。

一体どうしたらいいんだろうか

「にゃうん、うにゃうる

「ああもう、猫ーうるさいー！」

全く感傷にもひたらせてくれないのかー！と、私は辺りをキョロキョロと見回した。すると、私の住んでゐるクリーム色のアパートから真っ黒な子猫が「なんつー」と一鳴きしピョウコリと現れた。

長いしつぽはゆらゆら揺れつて金色の瞳でこちらの気配をジッく窺つてゐるよつてみえる。 . . . かわいいじゃないか。

「おいでーにやん」

猫はもともと大好きなので、思わずかまいたくなりスーパーで買ったかまぼこを取り出した。

こんな夜更けにアパート近くでかまぼこを振り回すなんて、怪しい人決定だ。ご近所さん、スルーし、て、ね。

思わず感傷気分は吹っ飛んだ。猫に感謝。

黒猫はしばらくジッとしていたが、たたたつと走ってきてかまぼこの匂いを確かめパクリと食べ始めた。んにゅうにゅ、ハグハグ言つててかわいい。

「はー猫はいいわ。一緒にいても感情に左右されなくてすむもんね」

じつこりじょつと腰を上げ、猫にバイバイをしてアパートの方へ足を向ける。

するとトトトトトと音がして私の脚に身体をすりつけ「にゅうん」と、一鳴き。うるつるした皿であるで拾つてと呟つてるみたい。

私はうーん、と頭をぽりぽりかきつにゃんこをアパートへ連れて帰った。

ま、いいか。大家さんにバレなければ！ 一人暮らしは気楽なもんだなあーとドアを開け暖房を入れた。

「「」の家に誰かがくるの久しぶり。猫でも嬉しいわあ。いらっしゃい猫ちゃん」

「「」ちゃん」

おじやまします、と言われたみたいでなんだか心が温かくなる。

私が勤めているのは貿易会社の企画部門なんだけど、そこでは「ここにこしているけどクールで謎な一面がある女」というわけがわからない称号をもらい、他人と距離を置いていた。私も自分がどんな人間かわかつていな。

でも仕事はそこそこ出来ると思つ。今日は企画の仮案を名川部長に届け忘れて、チラックしてもらい再度作り直しといつ残業をしていたけれど。そう、企画は何度も何度も海外や国内企業で通用する斬新なチャレンジやプランを生み出さなければならない。知恵と時間の勝負なのだ。

名川部長は愛妻家で知られる50代のちょっととほつちゃり紳士で、今日も「片岡さんがミスするなんて珍しいね。修正したプランは明日まで提出待つから今度はしつかりね。一緒にがんばろう」と、言つてくれた。このお父さんみたいな存在は心をぽかぽかにしてくれる。

他人と距離を置くけど、仕事を円滑にするためにいつもここにいる。でも絶対にプライベートには立ち寄らせない。

この原因はなぜだろ？と思いつつ、ふと田舎にいる家族を思い浮かべる。

その後、うじうじしてもしょうがない！腹は減つては戦は出来ぬ！

と、作って冷凍していたハンバーグを焼き大根をすり下ろしポン酢をかけて、菜の花の辛子和え、朝作ったインゲンと豆腐の味噌汁、それとノンアルコールビールといつしょに遅い夕食をとった。

お酒が飲めないのはイヤだね。ビールや焼酎でフハア！といつてみたいものです。

にゃんこは私が作った、かまぼことインゲン入りのお粥を食べている。またハグハグ言つてる。癒されるなあ……

拾った子猫（後書き）

「どうでしたか！？」この猫は秘密があります。なんとなく想像付いていらっしゃる方もいるかと思いますが（笑）もし、こんな料理出してほしい、というのがありましたら教えて下さい。話に登場させちゃいます！次回は真由子は猫に名前をつけます。2話目にしてR15になりますので恐いです。

綺麗にならない？（前書き）

こんにちは。桜が咲いてきましたね。近所では桜祭りなるものがありました。某検索サイト様に登録しようと考えていましたが、パソコンに疎いため軽くパニックです。。。絶対なんか間違つてそうです（^_^;）ではお楽しみください。

綺麗にならない？

「『あわづさまでした』

テレビで今日のニュースをチェックしつつ、飯を食べ終え、すでにご飯を終えた子猫を膝の上に乗せ紅茶を飲んでいる。

今日の紅茶はミルクたっぷりの「アッサム」で、それにすりおろしたショウガを少しとハチミツもいれてある。

子猫はお腹いっぱいになつたのか「ゴロ」「ロ」と喉を鳴らしている。時折、ジッと見つめてくる。

「どうしたの、にゃんこ？ 私が美人だつて？」

一人暮らしではの独り言をいいつつ肉球をムニムニする。ただお腹いっぱいで眠いのかそれが気に入らないのかわからないけど、「なん」「んにゃつ」など鳴いている。てしつとパンチされても痛くも痒くもない。

その時携帯にメールがきた。差出人は……過去の人。
嫌いになつて別れた訳じやない。ただ遠距離恋愛になつてしまつてうまくいかなくなり、向こうから別れを切り出された。

『「めん、やつぱり離れるとダメだ』

付き合って3ヶ月。なんとなくそんな電話だらうと分かっていたので、強い女を演じるしかなかつた。引き止めるなんてことできなかつた。なんだかむなしくなる気がするし、何より相手がそういう女の人が嫌がる人だつた。

『いーよ、そろそろそんなこと言つてくるのわかつたしね』

『うん。『めんな』

『ハイハイ、まあ友達に戻るつ。あんまり私のことは気にしないで大丈夫だからね』

精一杯声だけでも元気なふりで大丈夫と言い強がつた。友達というポジションだけが唯一の橋だ。好きなのに別れた。それがつらい。だから何年もしこりになつてゐる。別れて以来会つてないのに友達として存在してゐる私は一体 . . .

この前久しぶりに届いたメールは共通の友人が入籍したというこ

と、ヘッドハンティングにより転職したことの報告だったのとて、も楽しくメールできた。入籍の話はおめでたい上に嬉しいものだし、仕事の件も頑張ったんだなということが分かる日本最大手の証券会社だった。そう、こんな風に何ヶ月かに1回はメールが送られてくる。

しかし今届いたメールには彼女がよくわからないという恋愛相談だった。それに適当にアドバイスなど返信をしてメールを終えた。

何だか無性に泣きそうになつた時、下から視線を感じた。私の顔を観察してる。膝の上で丸まってる猫の金色の目が私の情けない感情を読み取つていて見えた。

アツサムをぐいっと飲み干し、猫をソファの上に乗せて頭をぶんぶん振る。

「そー明日のお弁当の準備して食器洗つたら猫も一緒にお風呂入ろうねー」

「ここやうん?」

何を言われたのか分からぬからか、私のテンションの浮き沈みを不思議に思つたのか、猫は小首をちょっと曲げてソファの上でお座りしていた。

明日のお弁当は、今日の残りの菜の花の和え物と唐揚げと卵焼き。

卵焼きは毎日朝につくる。気分によって砂糖だったり、ダシ巻きだったり、醤油マヨネーズだったり、青のり入りだったりする。

唐揚げの下準備をして完了!—このストレス解消兼節約の趣味は本当に最高だ、と自負している。

お風呂の準備が整い、洗面台の前に立つ。

最近忙しかったからかなり痩せちゃったかな。肌荒はないみたいだけど・・・と、ブツブツつぶやいていた。

実際、真由子は痩せている訳ではなくスレンダーなだけだ。大学時代の友人や会社の同僚からは「真由子はなにを食べても太らない」となぜか怒られていた。

身長165cmでスラリとした腕と脚、そして色白の肌とぱっちりした目と紅い唇、腰までのちょっとだけ内側にくせ毛がかかった漆黒の髪の存在は、彼女を強くも見せ、また優しくもみせていた。

それに加え、笑っていても何を考えているか読めない、また謎の私生活などから一部の男性から「深海の黒百合」とささやかれていた

ることを、本人は知らない。

まあ特に進んで恋愛をしようと思つていらない真由子は自分にあんまり興味がないようだが……

「猫ーお風呂入るよ、綺麗にしてあげるー」

私はまず脱衣所にいた猫を先にポイッと浴室へ放り込んだ。そして自分も服を脱ぎ髪を一つにまとめ浴室へ入った。すると、水がたまつた浴槽を不思議そうに観察していた猫が振り向き、ぴょーん！と飛び上がった。私もビックリだよ。

「に・・・・・いやー？」

わたわたと地面を搔きながら前へ進もうとするがタイルが滑つてうまくいかないみたい。びっくりして爪が出てくるからなんじゃないのかな？思わずクスリと笑いが漏れてしまつ。

「ああにゃん」様、お身体洗いましょうね

しかし捕まえようとするとい、

ムンズ！と捕まえ、ぺたんと女の子座りをしていて付いていた両足の太ももに猫をはさみ、向こう側を向いていた猫の背中からゆっくりとお湯を掛けた。

一瞬ビクッとしたが、次にはトロンとした声で「んみやー」と何とも気持ち良さそうな声で鳴いていた。

「……ちをむかせた際に再度ヒケツとして目が泳いでいたが結局おとなしくなってくれた。

「ひんひん」

鼻歌を歌いながら猫を無添加ハーブ石鹼で洗つた。動物用シャンプー買わなきやね。

しばらくぐじつとしていた猫だが突然、てつちてつち、むにむにと私のお腹や胸をペチペチと肉球パンチしてきた。

「あっ、やっ、猫！なんて失礼なの。女の子のお肉はやわらかいん

だから、もう

しばらく私の邪魔にならない程度に私の胸を中心にたたいていた

ので放っていた。だつて猫だしね。爪さえたてなればいいしね。

「あんつ、そこはすぐすぐつたいからダメ

しばらくして泡を落とす為にお湯を掛けようとしたらパンチを断念したみたいだ。今はプルプルと身体を震わせ水はじいて毛並みを整えている。

私は自分の身体を洗い、浴槽に入る。

どうやら猫も入りたいみたいなので体育座りしてお腹と太ももの間に入れてあげると、またトロンとなつていた。

しばらくお互にジッと見つめあつていた（ちなみに私が見ていた理由は、猫つてぬれてる姿はまぬけだから面白い）けど、猫はフツと顔をそらし私の首に付いた水滴を舐めてきた。

「やつ！猫つ舌痛い！」猫の舌はザリザリする。

すると猫はショボンと頸垂れ、でも気持ち良さそうに私の肩や胸に身体を預けてきた。

「これからはたまにお風呂へ入れてあげるねーと話しながらある」とに気が付いた。

「『』やんこ様、お前なんこつもじょひ。男の子だから強い名前がいいよね」

「なつ。『』やん」

「そう、猫はどじゅやらオスだった。洗っている時に『あ、男の子なんだね』といつと、なぜかカチン、と猫は固まってしまった。

うへん . . . フアラオ、権兵衛、バンジー、ポン吉、クラクレス . . . 色々と男の子っぽい名前をあげたけど、この猫にはどんな名前も合わない気がした。

漆黒の毛並みに冴と黄金を含ませたような色の強い瞳、歩く姿だつて猫のくせに何者にもとらわれない品格を携えてるよつを感じる。

「ダメだ! 決まらなこー! うなつたらもうあなたの名前は”かまぼこ”ね!」

真由子のネーミングセンスが爆発した瞬間だった。

綺麗にならない？（後書き）

真由子は出合いで思い出の品を落としてしまった。まだ全然R-15じゃない。。。ちなみにうちの実家の猫は拾った場所の名前をいじりました。

読んで下さる方がいらっしゃるみたいで嬉しいです（*^-^*）飛び跳ねました（事実）

まだまだお付き合いでただければ励みになります。ありがとうございます。

それぞれの存在

静かな薄暗い部屋に何かを叩く音が響いていた。1人の若い男が眉間にしわを寄せ書類を手にしていたところ、扉の向こうからバタバタと音がしてきた。さらにしわを深めた瞬間、バンッ！…という騒々しい音と共に白髪まじりの小太りの男が転がり込んできた。

「夜分遅くに申し訳ござりません！なにぶん急なことで……」

「ああ挨拶はいい。で、ギル、どうだつたんだ？」

「コツコツと机を叩いていた指を止め、両手を組み顎をのせ目線を向けた。ギルと呼ばれた男はまだ興奮した様子であつたが、息をとのえつつゆつくりと話し始めた。

「やはり殿下の仰る通り、扉で異界へ行つたと思われます。扉はまだエリック様の部屋にあることはあるのですがエリック様しか通れないようになつていまして、魔術研究員も右往左往している状態です。しかしまさか創り出すのではなく、クローゼットの扉にあんな高度な異界渡りをかけるとは思つてもいませんでした」

「そうか。いつもすまないな。エリックが迷惑をかけていつもいつも自分を悩ます存在に頭を抱えたくなった。

「とんでもない。エリック様はまだ12歳ですし若い頃は何にでも

挑戦してみたくなるものです。私もはるか昔研究長になるまでは無茶ばかりしましたよ。まあ今回の件は度が過ぎますが・・・それにあなたたち兄弟の迷惑を数えていたら指が何本あつても足りませんぞ？オルベルト殿下」

ギルは一やりと笑い反対にオルベルトは苦虫をつぶしたような顔になつた。今では執務室の机に座つて雑務をこなすが、昔はずいぶん”やんちゃ”をしていた。

「この件は俺が直接解決しよう。扉を通り抜けても血がつながつていればたぶんどうにかなるだろ？」
オルベルトは重い腰を上げ、ギルとともに弟のエリックの部屋へと向かつた。

—————

真由子は以前から、あるプロジェクトの企画チームに参加していた。チームの筆頭は名川部長であり、真由子はこのプロジェクトのために仕事をしつつ語学の勉強や資格取得など並々ならぬ努力をしてきた。

そのプロジェクトとは「貿易会社でありながら、貿易関連会社にフェアトレードを推奨する国際プロジェクト」だ。フェアトレードとは、途上国の生産者に公正な賃金や労働条件を保証した価格で商品を購入することで、途上国の自立や環境保全を支援すること。

もともと、不正貿易などの見直しへついてのプロジェクトに関わりたいと昔から望んでいた。今その一歩を踏み出せるかも知れない、と強く感じているのだ。

「片岡すげえな、その歳で抜擢かよー」 「真由子先輩すいこですっ！」

何人かはそう声をかけてくれたので私は「ありがと。企画コンペとか頑張ったかいがあつたわあ」とか「調査に協力してくれたおかげだよー」と喜びを素直に受け止めた。

その一方で嫉妬による理不尽な誹謗中傷を受けることもある。でも私は毅然としていた。常に飄々としていたし、負けたくもなかつた。

しかし最近、「片岡真由子は上司たちを誘惑しプロジェクトチームへ入った」という噂が流れたため、現在はチームメンバーと共に社長室にいる。

「片岡さんは正義感が強くそんなことをする子じゃない」「ひがんだ奴らがそんな噂を流しているだけです」

などと、部長や先輩たちが必死に言っているので私は不覚にも泣き

そうになつた。

そうなのだ、話が飛び火しそぎたのだ。一緒にプロジェクトを行う他企業などへの我が社の信用が失われてしまう可能性が出てくるまでに肥大してしまつた。

私はプロジェクトを抜けバックアップにたることを決めた。

みんな必死に引き止めてくれた。だけど自分だけが侮辱を受けるならいいけど、我が社のイメージダウンになつたりお世話になつている上司や、なにより厳しくも優しい名川部長に迷惑をかけたくもなかつた。それにまた次の機会もやってくるかもしれないからその時を待とうと思つた。

噂で人間の信頼関係や家族が壊れたりすることが多くあることを真由子は知つていた

ん？ ぼふん？ ？ 大きくて不思議な音が居間から聞こえたよつな？ まさかかまぼこのお、おなひ ． ． ． ？ など考えていると、

「 一 や うん 」

かまぼこのはトトトと軽く足音をたて玄関まで迎えにきてくれた。拾つてきてからもう3日間一緒に生活しているが、この噂で気がめいりやうになつてもかまぼこのがいたからどうにかやつていけた。

「 んにゅうう？」

何だか泣きたい気持ちになり浮上出来ないまでに気分が沈みそうになつていたら、下から心配そうな、そして何か心の奥深いところまで見透かしたように見つめてくる視線が絡みついてきた。側にいてくれてありがと、かまぼこ。

「 いい子にしてた？ 今日の夕ご飯はおでんだよ。たまご、ちくわ、大根、あ、かまぼこも入れるよ。鶏肉もいれるから、最後は鶏肉の和風リゾットで～ね」

かまぼこが大好物なかまぼこのは、しつぽをピンーとたてにゅうにゅう鳴きながら脚に擦り寄つてきた。まるで言葉がわかつてゐみたいでなんだか笑えてくる。

人に話したり泣くことが得意じゃない私は、行き場のない怒りと悲しみを心に閉じ込めた。

それぞれの存在（後書き）

理不尽なことは誰しもが直面すると思います。その中で、何を考え誰を相手にどんな方法で戦つていけるかで人間は大きくも小さくなるような気がします。

私は小さくなつてる気がしますね。ボーン

携帯で読まれている方が多くてますので前書きは書かないことにしました。読みやすいかな、と思つて（＾＾；）

今日は説明的ですみません。次回はふんだんに面白へじよつと語つてこます！また次回もよろしくお願ひします。

拾つた成猫

猫を拾つて6日目――

プロジェクトを降りバックアップにまわったことで会社での風当たりはすぐに弱まつた。最近ちゃんと「飯も食べていたので胸もDカップへ戻つた。ちなみに私は太ると上半身（主に胸）に肉がつくという体质だからいつもDかEカップだ。

書類と格闘し終えべつ甲のバレッタで一つに束ねていた髪をきれいに直した時、後輩が声をかけてきた。

「先輩！お昼ご飯行きましょー」

明るくてお仕事頑張る後輩の美佳ちゃん、オフィスではお財布振り回すのはやめましょう・・・ほら課長がジトッと睨んでるわよ？

近くのイタリア風バールで生ハムとルッコラのパニーニとオレンジジュース、美佳ちゃんはベーコンとほうれん草のキッシュコヒップルサイダーを注文し席に座つた。

私がプロジェクトへ決まつた際と辞退した際に、びっくりするほど喜んで、そして怒り悲しんでくれた。少し茶色の肩までのボブとブーツとしたほっぺたがかわいい、人の気持ちを思いやれる本当に優しい子だ。

「先輩が完全にプロジェクトから抜けなかつたんで、翻訳が必要なものや案の構想のまとめが早く出来そうだつて斎藤先輩が言つてしま

したよ。しつかし真由子先輩を叩いてたやつらホントにムカつきますね！今では素知らぬ顔じゃないですか！？あんだけ書類にハンコ押し渋つてたり必要な時にわざといなかつたりして真由子先輩の伝達ミスのせいにしたりしてたのに…」

美佳がキッシュをぱくぱく頬張りながらキーキー言つてゐるのを見て、真由子は密かにハムスターみたいだと思つた。

「いいよ、もう。そんなことがあって仕事にスマーズにいかなくなつたら大変だもの。このプロジェクトは集中的に行つから一つの案にあまり時間がかけられないからね。」

「う、そうですね」

「それより、斎藤先輩とはどうなの？」「飯くうい誘えばいいじゃない」

そう、美佳ちゃんはプロジェクトに加わる営業部の斎藤先輩に恋をしている。そして斎藤先輩もまんざらじゃないみたいなのだ。企画部へ来た際にチラッと美佳ちゃんを見てくるのを私は密かに知つてゐる。こういう時、いいなあ恋愛つて…つて思つ。落ち着いた先輩がキーキー言つた美佳ちゃんをなだめている所を想像するとブブと笑つてしまつ。

お互ひを思いやれるなんてすゞく素敵なことだと思つ。

突然しどりもどりになる後輩との楽しい食事を終え、またパソコンにかじついた。今日中にエクセルで途上国数ヶ国と主要な日本

企業の貿易グラフを作らなあや。

出来ることをやる。機会はまたやつてくれる。そう信じてこなきや。
…………悔しくて泣きそうだもの。

アパート近くの小道で、私は立ち止まっていた。暗闇でよくわからぬがベージュのよくな色の猫が横たわっている。かまぼこよりもだいぶ大きいから成猫だと思つ。

「猫、大丈夫……？」

死んでるんじゃないかと恐る恐る声を掛けるといつすら口を開き「みやう……」と弱々しげに鳴いた。こりや危ないと私は猫を抱きかかえ家へ急いだ。

「かまぼこただいま！ 猫拾つやつた

ドアを開け、居間へ入り猫を新聞紙の上に横たえさせた。するとおかえりーと小走りでやつてきたかまぼこが猫を見て「みややつ！ いやう！ んにやうう」と鳴き出し猫をたたき始めた。目を開けた猫にホツと安心したようにかまぼこはソファへ飛び乗つた。

私は「とりあえず」飯だと思い、ミルク粥とかまぼこ用に買った栄養剤をスプーンで「」えた。私はあとで「」飯食べよう。

「だいぶ動けるよつになつたわね。かまぼこと知り合ひ？なんだか目が恐いけど」

「ご飯を食べ力が出たのか猫はさつきからジーーーー」とかまぼこ」を睨みたまににやあにやあ言つていた。かまぼこ」はソファに寝そべりしつぽをコラコラ余裕の表情だ。子猫なのにふてぶてしい。

拾つてきた成猫は明るい場所で見ると驚くべき美猫だつた。シャンパンゴールドのような毛色で、瞳は濃い紫色だつた。こんな毛色の猫いたつける？と思いつつもかまぼことおなじく気品あふれる猫には違ひなかつた。

「さて、少し汚れてるからお風呂に入らうか？かまぼこはゆつくりしててね」

「こや？」

猫はいきなり抱えられ驚いたよつて、手足をバタバタさせていた。

まぼこ」は「うこやうこやん、なふつ、んにヤア」など奇声をあげていた。まるでニヤニヤと笑つてこむよつて見える。

そして先に猫を浴槽近くへ放り（まだ若干暴れている）、服を脱いでガラス戸を開けた。

すると浴槽を眺めていた猫は振り返り

「みや みや！？」

ぴょーん！

カシカシッ！

鳴いて飛んで床を蹴るという、全く同じ反応に笑ってしまった。しかし猫なのに裸を見て飛び上がるなんてかわいい。

「さあ汚れたとこを洗つてあげましょつかね」

かまぼこの時のよつこ、床にぺたんと足をつけ暴れる猫をガつと膝のところでおさえた。「フーフーッ」言つてるけど気にしない。いい子だからひつかいてはこないみたいだし。猫は私に背を向けてお座りして観念したように静かに石鹼で洗われている。たまに「 . . . んにゃ」など聞こえてくるから気持ちいいんだろう。どうだ私のテクは。

少しするとかまぼこがガラス戸の前に来ていた。なので逃げようとする猫を押さえかまぼこを浴室へ入れた。まだ「ヤーヤ」しているようだ。気品があるのに 。猫はさつきよりも激しく「フーフーッ」と鳴きかまぼこを威嚇し始めた。

そして猫をひっくりがえし向かい合わせにした瞬間、やはつちよ
と驚き視線をつむつむとむよわせていた。猫に私のロカッピの
柔らかくて形もいい美乳を見られてもなんともないのにな?と思
つて、猫を持ち上げた。

「あ、君も男の子なんだね」

やしてやつぱり・・・・・ぱつちつ皿を見開きチロコと少しだ
け舌を出してカチンと固めた。

「わしゃべる、ハジマチャヒヤウ」

かまぼこ、その鳴き声気持ち悪い。言つとくけどあなたも同じ反
応だつたんだけど・・・と心の奥で呟いた。

拾った成猫（後書き）

この猫の名前は何になるのかはもう決めています。

ご覧になつた方も多くいると思いますが、かまばこのお風呂を詳しく書いた話を「活動報告」のお礼小話のといひにおこしています。よかつたらぜひ

（あ、ストーリー的には読まなくとも全然問題はないです）

甘えん坊とクール系

笑う不気味な子猫を尻目に、大人しくなった猫を洗い始めた。このにゃんこ様の名前なんにしようかな。この綺麗な毛色だからなんかゴージャスな名前がいいよね。

泡でわしゃわしゃしつつ考えていると突然ひらめいた。

「社長つーあなたの名前は社長だよー将来出世しそうな感じ。かまぼこと仲良くな?」

シャンパンゴールドの毛色と長いしつぽ、何だか動きも気品あふれる堂々とした感じ、知的な紫の目。イメージはエリート企業のやり手の若い社長だ。

2匹の猫はきょとんとしていたが、何度も「君は社長」と言つていふと理解したようだ。賢い猫たちだな。

最後に手足の泡を落とす際に、膝の間で挟まっていた社長のお腹を左手で抱き寄せた。すると身体が少し固くなつた。ん?胸があたつた気がしたけど嫌だつたのかな?目に水でも入つたのかな?なんでかまぼこはまた不気味に「うにゃうにゃ」「言い始めたんだろ?」

それから2匹の猫を浴槽のふちに座らせ素早く髪や身体などを洗つて、浴槽に浸かり社長を体育座りした膝の上に乗せた。こつちを向けたときちらりと顔や胸を見た後は私の後ろや天井辺りに視線をさまよわせている。

「んにゅう、みゅうっ」

かまぼこはお湯をはった洗面器の中でのんびりしていたが、手で水をパチャパチャさせどうやらかまつてほしい様子。もうどうこでもしろという感じの社長を今度は洗面器の中に入れ、かまぼこを抱えた。

てしひ、ペチッ、ふにゅ、むにむに・・・

「あっ、かま・・・・まこッ、もーまた。こつもこつもやめなさい」

最近、甘えん坊にやんこは私のお腹や胸をむにむにするのがお気に入りらしい。それにお風呂に入れるのは今日で2度目だけど、ご飯を食べた後や一緒にベッドで寝る時はいつもくつついてくる。こんな小さな子猫が外に1匹だけっていうことはビックリ考えてもネグレクトだとしか思えない。寂しいんだろうな。

だからって直に胸を執拗に触られたり顔を谷間に埋め動かれると妙な気持ちになるからやめてほしいけど。決してそんなプレイじゃない!と心の中でつっこんでみる。

ふと社長を見ると驚いたようにかまぼこ(と胸)を見ていて、目が合いつとすぐに逸らした。何だらつ?

――――――

ふうせつぱり。今日は金曜日。土日は休みでゆっくりできるから夕食の餃子を作る。社長のこととで後回しにしちゃったしね。

餃子は焼いて冷凍したり水餃子にしたり上げ餃子など色々出来るから便利料理だと思う。材料はひき肉とニラと春キャベツ、にんにくとしょうが。醤油と塩こしょうと酒で味付け。

猫用に水餃子を作りたいと思つかひ、一一二などは省いたのも作る。

フライパンからガジガジ焼けてくる音が聞こえてきた。さつきから2匹が興味深そうに見ている。蓋を開けると水蒸気と匂いの強さに驚いていたようだ。

白いほかほかの「こはん」と卵と小松菜の中華風スープ、それと焼き餃子はポン酢で食べる。

2匹には薄味の水餃子を小さく刻んだもの。かまぼこはまだあまり食べれないみたいだからミルク中心。

「いただきます。なんかいいね、みんなで「こ飯食べるのつて

「にやうー」

「…………」

クールな感じだしあがままなのかな、と思つてたけどちゃんと社長も食べてくれた。何だか食べ方がたどたどしいけど、今までどうやって「こはん」食べてたんだろ？首輪もないから野良だと思うし自分で獲物捕まえてたりしてたんだろう。あんなに品がいいのにたくましいなあ。

あつという間に食べ終えた私たちは食後の1杯を楽しんでいた。今日は爽やかなダージリンのストレートティー。かまぼこはソファ

に座つてゐる私の膝の上で喉を鳴らし寝そべつていて、社長はラグに寝そべりこつちを見ている。

「ここ数ヶ月は仕事関係で土日も心のゆとりがなかつたから、プロジェクトから抜けて正解だったのかもとほーっと考えてはいけない事を考えてしまつた。プロジェクトに入つたら入つたで嫌がらせじみたことをしてくるいい歳した大人たちを情けなく思い、ストレスは増えてリラックスなんて出来なかつたしなあ。

何だかまたウルツときてしまつた。

「ダメな人も多くいるよね。せつかくやりたいプロジェクトに入れたのに若すぎ、何より女だからつてさ。生まれで差別するつてのはどうなの。変えられるものじやないじやないよねえ？それに努力してない訳なんてないのに」

「う」「ゅううう
「. 。」

それから少し仕事の愚痴を聞かせてしまつた。

「ごめんなこんな話。かまぼこ、社長、この土日は思いつきりのんびりしようねー美味しいものいっぱい作つたげるね」

「なう」
「. 。」

慰めてくれたり話を聞いてくれたりしてゐみたいでなぜか安心で

きた。

そんなこんなで金曜日の夜はゆっくりと静かに更けていった。

ーおまけー

ちなみに今夜はいつも胸に顔を埋めて眠るかまぼこが枕横でさつさと丸まつた。ベット横にいる私とソファでうとうとしている社長を見つめてくることは今夜は社長を抱っこしりとこう事らしい。サムズアップ！僕の代わりに優しくしてやつて？とは優しい子猫だ。

逃げようとする社長を捕まえると、最初は「にやつーーー！」などもがいていたが「野良は大変だつたよね？今夜は甘えていいんだよ」と、胸にむぎゅっと押し付けて背中や喉を優しくなでているとやがて大人しくなった。

なので今夜は（嫌がる）社長を（無理矢理）胸に抱っこして眠つた。

甘えん坊とクール系（後書き）

動物と一緒に寝るとあつたかくてすぐ眠くなつたりやうんですね。
しかしムツツリだよなあ社長。きっとお風呂のむにむに事件も人間
だったらなんとも言えないことになつてたんじやないかと・・・。
また更新出来るように頑張ります（^ ^）

もぞつ、もぞもぞつ

なんだかさつきから首元がむずむずする。久しごとに心身共にリラックスして惰眠を貪っていた真由子は恐る恐る目を開いた。すると、

「…………すびツ」

「！」

横向きで寝ていた私のパジャマの中で社長が眠っていた。首にさらりとした毛があたり鼻息はなんとも愛らしいと思いつつも、よほど疲れたのか一向に目を覚まさない。てゆうかなんでパジャマの中？下から潜り込んだ？それにしても上のボタンが2つはずれてるしなどボーッと考えていると、

「んにゅふつ」

私に腕枕をされているかまぼこは起きていまた一ヤーヤヤ笑いしている。毛並み柔らか黒猫さんの気品が……

いつからしてるかわかんないけど2匹の猫を腕枕してるような状態で手が疲れてきたし、そろそろ11時になるし起きよつとしたとこ、社長がハツと目を覚ました。

「フギヤ！」

「痛つ！いたた、社長落ち着いて！」

ビックリした社長がガリツと首に爪を立ててきた。まだ混乱して

パジャマの中でもがいでいる。ててててててつーと手足のパンチを
くらいお腹や胸が痛い。これは首元に引っ搔き傷ができるだろうな
あ・・・・・

社長はかまほこの「にいやーん」とこつ一言でピタッと止まりそ
ちらを睨んだ。そしてパジャマの首もと部分からすりと出て行き
振り返り、申し訳なさそうに頭を伏せ首の傷をひと舐めした。少し
痛んだけど、その後傷の部分がジワリと温かく感じた。

「？」

なんで温かいんだろう？

「・・・・・・・・・・・・」

「まあいいか。ありがと社長さん

「・・・・・・うなん」

ベッドから降りてソファへ向かう優雅な猫にお礼を言つとそつけ
ないけど返事はちゃんと返つて来た。

こやむこやむ言いながらててつとそれに付いて行く黒猫を尻目
に鏡で首をチェックしてみると血が出てたと思つたけど赤くもな
つていなー。

寝起きの真由子は猫マジックだと信じて洗濯物や観葉植物に水や
りをした。

さて、今日はプランチだ。餃子の皮と林檎があるのでアレを作ろ

うとしたところバターがなかつたので猫に留守番を頼み財布を持つてコソビに向かう。

「ただいまー」

「ぼふんぼふん！」

なんだなんだ？ 2匹そろつてお、おなら……？
いやいやそんな、と考えるとかまほこが「にやうん」とお出迎え。くーー！ しつぽをピンとして擦り寄つてくるなんて愛いやつめ。居間では不機嫌そうな猫がソファに寝そべりしつぽをバシバシ揺らしてこっちを見ていた。か、貫禄が……。

まず林檎を小さく切りバターと砂糖で煮詰める。少しどろみが出てくるまでじっくりと。そして最後に火を止めシナモンを入れ混ぜる。いい香りがキッチンに漂い、猫2匹がキッチンにあるテーブルの上でお座りして興味深げに観察してきた。

そして残つてた餃子の皮に包んで、油で揚げると……アップルパイの出来上がり！ ！ 簡単なんだよねー

これにダッソのバニラアイスをトッピングしてコーヒーを飲む。

猫用にも小さいやつを作つた。シナモンは香辛料だからいいのかわかんないけど試しに少しだけ入れたらとても好評みたい。

2匹とも匂いを嗅いだと、ぱりぱりハグハグしながら食べミルクを飲み、かまぼこはおかわりの催促の、鼻で皿をこっちに向けてきて上目遣いで小首をかしげて「にやあ」、を実行してきた。

社長はズイッと皿を手で差し出すだけだったけどそのふてぶてしさが最高にかわいかった。

人間は動物の誘惑に弱いだめな動物だよね。うん。

お腹いっぱいになつてソファでじろ寝。かまぼこは仰向けになつた私のお腹の上でじろじろしている。じろじろするつていう言葉のじろじろつて、寝る子の猫の「ロロロロ」となる喉の音だと思つなあ。

社長はベランダに出て外を見つしながら考へてゐる様子。2階だけ落ちないか心配だ。よつと起き上がりかまぼこをソファに乗せ、社長を赤ちゃんを抱くよう横向きに抱っこした。

相変わらず無言でクールなにゃんこだ。

「外に出たい？でもダメだよー。ここは車が多いから危ないから···ごめんね。我慢してね」

チコッ

「…」

社長にキスされた。両手とじつぽがペッシュと固まる。

「ウニヤウーんにゅうー」

なぜか足下に走ってきたかまぼこが抗議しているよう鳴いている。なので目を泳がせている社長をおろし、かまぼこを抱っこして「こつもお迎えありがと」と、チコッとキスしたらたいそう喜んでるようだった。

のんびりとした午後の春の風ががまるで私たちを包むように吹いていた。

十羅田（前説）（後書き）

あのアップルパイはよく作ります。ラクチンです*

あ、活動報告のところに小説書きましたのでよければぜひまた見て下さい。お題は「電子レンジ!」です！

昼の陽気が嘘のように夕方から曇が空を覆い小雨が降ってきた。風も強くなり慌ててベランダにある洗濯物を取り込んだ。

春の雨はなんだ恐い。

今日の夕ご飯はフキご飯とカブと油揚げのお味噌汁だった。

灰汁抜きしたフキの小口切りに炒り卵と胡麻、そして少し塩を炊きたてのご飯混ぜて食べるだけで料亭の和食の味になる。フキの若草色と卵の黄色、そして白いご飯の対比もまた楽しめる、と母が春になるといつも作ってくれていた定番ませご飯だ。

しばらく実家には戻つてないが私は「必要のない存在」だから別に帰らない。自分の仕事をしてしつかり自立していれば干渉されない。んーラクチンだ。

猫たちにはご飯と炒り卵と胡麻、そしてお味噌汁を混ぜたねこまんまをあげた。かまぼこはミルクより私が作ったご飯が食べたいらしく、社長と共にいつも珍しそうにご飯を見たあとパクパクと食べている。灰汁や苦みがあるからあげないでいたフキにも興味があるらしく一つだけあげたら小首を傾げて「にゃん」攻撃がきた。片岡真由子、撃沈・・・。

そんなこんな幸せな土曜の夕食、そしてのんびりお風呂に入った。
かまぼこはいつも私がお風呂に入っているときそつするよつ、元より
ガラス戸の前でお座りしていた。どうやら社長も近くにいて向やら
にやーにやー言ひ合っていた。毛色などからして親子じゃないことは
思ひなどはやつぱり知り合いなんじやないかな、と思ひ。

「んにゅうー

風呂上がりにゆくつとテレビを観ながら、寝言を言つてゐるか
まぼこを膝に抱え撫でてると社長は不機嫌な目で私やかまぼこを
見てゐる。

社長はいつもかまぼこや時には私をも睨みつけている。猫の性格
も色々あると思うから特に気にしないけど、私を見るときたまに何
かを見透かされていゐる氣になる。春の雨みたいな存在だ。

午後10時をまわった頃、突然チャイムが鳴つた。その音に驚い
たかまぼこと社長はピッ！としつぽを伸ばした。

誰だら？こんな夜更けにアポなしなんてきつと大学からの友人2
人のうちどちらかだらう。彼らは本当にたまにだがいきなり私のご
飯が食べたいだの彼氏と喧嘩しただの上司の愚痴などを言いにくる。

お菓子やワインや生ハムなどを持ち合つたりとこれがなかなか樂
しい女子会なのだ。

はい

何の気なしに返事をしインターフォン画面を見て息をのんだ。

「真由子ごめん、突然来て」

一瞬ビックリして声が出なかつた。前へ進めないでいる原因の男が突然現れたのだから . . .

「英田、どうしたの？ こんな夜更けに」

慌てて動揺を隠し普段通りに笑顔に戻った。たって今は友達たもの。私つてホントかわいくない性格だなあとツッコミさえ入れる。

「ちょっと相談したい事があるんだけど今いい?」

「今？ ちょっとあんた彼女いるのにこんな時間に女のどこにきて信
用なくすよ？ 相談事なら駅前のスタバで少し待つてて。すぐ行く」

英臣は腑に落ちない、何か言いたげな顔をしたが「わかつた。スマタバでな」と言い画面から消えた。

「なあ、ハサウエー？」

トトトシと居間のドア近くにいた私のところに駆け寄ってきて下か

ら覗き見てくるかまほこは、まるで「アイツ誰? 大丈夫?」と心配してくれているようだつた。社長はラグの上に座つてこいつをジッと見ている。

「とりあえず薄く化粧をしパジャマからジーンズとベージュのセーターに着替え財布と携帯を持った。

「ちよつと出かけてくるからお留守番お願いね。すぐ戻つてくるからさ」

そう言つて群青色のカーディガンを羽織つて扉を閉めた。

――――――――――

「『めんなこんな遅くに』。前にアパート変わつてないつて言つてたからさ」

昨年、大学時代の仲のいい友達と飲みに行つて以来なので約8ヶ月ぶりだ。ヘッドハンティングにより東京に戻つてきてから1ヶ月経つたはずだ。

「いいよ、なんかあつたんでしょ? 彼女と仲直りできた? 会社首にでもなつた? まあチーズケーキと熱いアメリカーノをトールでおごつてくれたら許してあげる」

英臣は「あいかわらず太らないからつてよく食べるな」と苦笑いしつつもソファから腰を上げ買って来てくれた。その後、英臣の新

しい職場の話や結婚する友人の話などを楽しんだ。

「まさか中村君がねーでも菅原さんと何だかんだ言いいつつラブラブだつたもんね。やつと結婚かあ」

共通の友人である中村君は、大学時代に他大学のマドンナの菅原さんを映画や食事に何度も誘いアプローチを初めて1年半後によくお付き合いを始めた。

私たちと中村君は映画サークルに入っていて、その集まりの関係で菅原さんに一目惚れしたそうだ。あの頃の私はロマンチックだなんだと騒いでいた。まあ今でもそう思つけどね。

手に持つカプチーノを揺らし一口にする、そんな姿も絵になるなあと観察していた。英臣は177cmで中肉中背で、少し茶色がかった黒髪にしつかりと人を見据える強い目の持ち主で大学でも結構モテていた部類だ。

「で？お前の仕事の調子はどう？」

「んーまあまあかな。以前メールで教えたプロジェクトあるでしょ。それに関われるようになつたしね」

ギクリとした。プロジェクトメンバーに選ばれ自ら辞退したなんて言いたくなかった。せめてものプライドだった。なんのためのプライドなのかわからなかつたけど、弱い所なんて今更言いたくなかった。まだ話してないけど、きっと彼女とうまくいくことについて相談してくると感じていた。私に相談してくる理由は「真由子は俺の性格を知つて感覚も合うしズバツと言つてくれるからい

「い」だそう。

そりや性格は合つし恋愛感情があつたから付き合つたんだからそうなのかもしれない。

「どんな仕事に関わつてもなかなか難しいよ。でも名川部長もいるしね」

「出た、部長！飲み会でもその名川部長つて人のこと尊敬してるだのお父さんみたいだの言つてただるー。・・・なあ、お前今いい奴いないのか？」

「どうでもいいでしょー。まあ悩んだら理解不能な男心についてとか相談するわ。今は仕事忙しいし。それにしても彼女との些細なケンカでもして相談しにくるなんて何があつたの？」

空気がすこし変わつたような気がした。なにか探るような感じだ。早く空気を変えたくてさつさと相談を聞いてこのお茶会を終わらせようとチーズケーキの残りを口に放り込んだ。

「あーまあ。彼女とは別れた。名古屋と東京じゃあやつぱり距離がありすぎてダメだった。フラれたよ」

「え？」

ちょっと前に喧嘩したからとメールで相談して来て、解決策や女性やらをアドバイスした。今回はわざわざ会いに（しかにアポなし自宅に）くるぐらいだから、ケンカが悪化したから話を聞いてほしいのかケンカ解決の為にもつと聞きたい事があつたのだと思つてい

た。まさか「別れた」って……

「だからお前と飲みたくないって……ダメか?」

私は絶句してしまった。別れた女のとこんな時間にくるなんかろくな理由じゃない。

そうだよ。こいつは勉強も仕事もできてしまっかりしてる。人前では寂しさや怒りなどさもないうつに振る舞う。でも、根本的な部分は寂しがり。

…………私と似ている。だからウマが合った。だから付き合ったにすぎないのだろう。そして英臣の仕事の都合で遠距離になつて別れた。なのにまた相手の都合で振り回されようとしている。私たちはウマがあうし友達として深く付き合つてきたから、3ヶ月間の恋人期間にも特にケンカというケンカもしたことがなかつた。

「だから、だから私のとこに来たの?話を聞いてほしくて?……身体で慰めてほしくて?」

「ズバツと言うなー。でもそういうことなんだ……よかつたら付き合わないか、また。やっぱり真由子という方がいいと思える時があつて」

私は底辺に残るアメリカーノのマグを握りしめた。

きつと私だけが好きだつたんだ。今日初めて分かつた。それと同

時に何年もしこりになつて忘れられなかつたのは、何年も大好きでこの瞬間を待つてたのだと気付いた。でもなんか違う。

「帰る ハーhee ありがと」

席を立とうとしたところ左腕を掴まれた。

「待てよ、ビッグした？」

どうしたつて言われても私はいつものように笑えないぐらいに動揺していた。またソファに座りながら俯きマグを両手で掴む。「「じめん、やっぱりちょっと無理。今気になつてる人いるから」

嘘を言つても逃げたかった。冷静になりたかった。

「 気になつてるつて会社の奴か？」

「そう。会社関係の人。もー関係ないでしょ。また何かあれば教えるよ」

「まあそうだけどな」

がしがしと頭をかき何かをつぶやいてる。どうやら私を誘えば「うん」と言うと思ってたんだろうか。私の存在つてこの人にとつて何なんだろ。気の合う友達なのかそういう関係にちょっとだけい存在なのか。

私が男だつたらよかつた。

そうすればこんなにこの人相手に悩まずに住んだのに。そうすれ

ば仕事でも認められたのに。そつすれば会社でもあんな惨めな思い
しなくてすんだのに。 そつすれば家でも居場所があつ
たのに

気まずい沈黙の中何も言えず俯いているとカツカツと足音がした。
フツと影がさし上を見ると、グレーのスーツを着た男が立つて私を
見下ろしていた。見つめているとさらにジツと見つめてくる。こん
なに意志の強そうな濃い紫の瞳と耳までかかつたさらりとした金髪
の男の知り合いは私にはいない。美形だなーと思つていて記憶に
残るような低い声で静かに名前を呼ばれた。

「真由子。迎えに来た。帰るぞ」

は?????

「え？ 真由子、なに？ 付き合つてゐる人いたのか？ 帰るつてまさか一
緒に住んでるのか？」

ソファに座つたままの英臣は訳が分からないと混乱しているよう
だつた。自分のマグを持つてゆっくりと私と金髪男を交互に見てい
た。

「ああそつだ。真由子は返してもいい」

男はチラリと英臣を見たが、何も言えずポカンとしている私の腰

を掴みまるでエスコートするようにスタバを後にした。最後に見た英臣もあっけにとられていました。

次から次へと湧いてくる色々な出来事によくわからず混乱したままの私は 気を失うという最高の逃げ道を選択してしまった。

土曜日（後編）（後書き）

女より男の方が恋愛を引きずるといいますが、真由子は引きずるみたいですね。結構女性でもそういう人は多いんじゃないかな・・・

と思います。

金髪男は誰なんでしょう。つてもちろんあの人です、あの人。

開け！」まー

綺麗で不思議な夢を見た。

人魚が青い海の中で気持ち良さそうに泳いでいた。尾びれは薄いピンクなのが光の加減によつては白銀にもとれる。胸は白い真珠の殻で隠されていて、脚まではあるであろう長い黒髪は身体にするりと巻き付いたり水中に漂つたりしていた。

神秘的すぎて言葉がでなかつた。

しかしその人魚と目があつた。彼女はにっこりと微笑み口をパクパクさせて何か言つてゐるようだつた。けれど口からは泡しか出ず水中にダイヤモンドが散つてゐるようみえた。

――――――――

「なつ！みやあなつうう
「にやう」
「んにやあああ、なうんつ
「なう」
「みやうん、」にやー」

何やら聞こえてきたのは猫2匹の声。私はハツと目を覚ました。

天井をみると部屋の天井と電球が見えたのでうちの家だと起き上がりうとした。するとそれに気付いたかまぼこがタックルを仕掛けた。

「にやあああ！」

ぱふつ

布団に着地し顔を覗き込んでくる。心配してたんだよ、と揺れる瞳で訴えて来た。さつきの英臣との出来事を思い出し、かまぼこをぎゅっと抱きしめた。

「ありがとかまぼ！」

猫に心配されるつてどんなだけダメな人間なんだ·····と、軽く落ち込んだ。

私は思い出したようにさつきの金髪の外国人っぽい男の人に考えをめぐらせた。あの人気が私をうちに送つてくれたつてことだ。保険証や免許証の住所でも見て運んでくれたんだろうか·····慌てて財布を確かめるとちゃんとお金もなにもかも盗られていないようだつた。いい人で良かつた！見ず知らずの人の前で意識をなくすなんてへタしたら犯罪にまき込まれてたかもしれない。

金髪に紫の瞳、近寄り難く誰しもを従えるオーラを纏つていたあの金髪男は誰なんだうう。少し社長と似てるな。高貴な感じとか···

···

そこで思わず「冗談で言つてしまつた。」の一言が自分の人生を変えてしまつと知らずに。

「社長……さつきのは社長でしょ？あの時私、少しテンパつてたんだ。ありがと」

猫2匹がピクッと動き両者は一瞬アイコンタクトをとったようにみえた。私は特に気にもせずかまぼこを撫で続け「さつき社長がねー」と話していると社長がいたラグの方から声がした。

「ほらみる。お前が助けに行けなんて言つからだ」

え？

「だつて真由子さんが困つてるとこなんて見たくなかったんだもん。それに僕みたいな子供が行くより兄様が行つた方がよかつたでしょ？やっぱり。あの雰囲気はちょっと僕には無理だしー」

え？

「この二重人格が……」舌打ちの音をえこえた。

「ちょ、ちょっと待つて？何で猫がしゃべつてるの？？」

私は新たな事態に錯乱状態寸前になりながらもとりあえず冷静にならうとしたが、今度はそこでしまつた、という顔をしたのは社長

だつた。

「 お前は俺に気付いたんじゃないのか？」

「気付くつて、え？ ただあの男が社長と同じ感じだから冗談言つてみただけなん、だけど ?」

目の前で起こっている不可解な出来事に、ダラダラ汗を流しているとかまぼこがベッドから飛び降り社長の元へ行きこつちを振り返つた。何だか少しだけ申し訳なさそうだけど田は爛々と輝いて喜んでいるようにもみえる。

「あーあ。真由子さんに気付かれちゃった。そのままスルーしきばいいのに兄様が話しかけるからだよ。僕の責任じゃないからね」

「 」

「ひつなつたら連れて帰るしかないよね！ 姿バレちゃつたし」

” ぼふんぼふん！”

以前も聞いたいきなり何かが弾けるような音を耳にして田を開けると、まさにさつき見かけた金髪男と私と同じくらいの身長のこれまたかっこいいけどかわいくもある中性的な顔立ちの黒髪金目の中年がいた。2人とも見た事のないような服装だ。金髪の男はさきほどのースツではなく、ダークグレーのシャツに同色のズボンそして膝までの黒いマントを軽く羽織つていて、少年はおどき話の魔法使いが着るような足首までの真っ黒のマントを着ていた。金髪男の腰に

重そうに鎮座しているのは紛れもなく銀と紫の宝石みたいのが輝く鞘に守られ凶器、長い剣ではないだろうか……

私がしげしげと見つめぶつぶつと「かまぼこと社長? いやいやそんな」と呟いていると、黒髪の少年が近づき少し大きな両手で私の右手を包んだ。

「」めんね驚かせてしまって。」のことがバレたら真由子さんを僕たちの世界にすぐ連れて帰らなきやならないんだ。じゃなきや真由子さんの存在がどこからもなくなってしまうんだ

「へつ？」

まだ頭がうまく働いてないせいか声が裏返つてしまつた。

「だからね、この世界で真由子さんを覚えている人間が誰もいなくなる上に真由子さん自身も跡形もなく消滅しちゃうんだ。だからすぐにつちへ来て。ね？」

小首を傾げる可愛らしげに仕草が、少年とかまぼこをダブらせた。

「真由子はもしかするとあの存在かもしれないんだ。気付いたでしょ? 兄様も。真由子の首元のアザ」

「……まだ決まった訳じやないがな

後ろの金髪男は腕を組み眉間にしわを寄せ横を向いてまるで自分は関係がないといつ風を吹かせていた。しかし少しだけこちらを見

たが目が会つた瞬間眉間にしわをわざりて深くし、パツとまた横を向いた。なんだなんだ？

まだこの事態が掴めず睡然としていると少年がにっこりと笑い、右手を顔の前にフツとかざした。その瞬間、私は急に眠気に襲われ再度暗闇へ意識を奪われてしまった。

片岡真由子（25）

最近身につけたスキルは、氣絶。

猫を拾つた時点で開けてはいけない扉へ一歩踏み出してしまつた。

開けいじまー（後書き）

さて、トコラッパしちゃこまー。やつやくです。

まだまだどうなつていいくか分かりませんが、猫ではなく人間になつたのラブ注入！していこうと思います。今後もよろしくお願ひします。

マッシュコトと純粹（前書き）

R15かと思われます。お気をつけてください。

ムッシツと純粹

四季があり自然が豊かで魔術が盛んなスーリアス王国——

この国は昔、同盟国との関係や領土拡大など様々な理由で無益とも言える戦争が起こり多くの国民の血を流した。

しかし現在では他国との貿易が盛んであり、また自然が豊かな国として他国からの旅行者が多く訪れる。

現在は魔術を用いた争いはあまりなく、かまどの火をつけたりなど生活の一部としての魔術のみの使用のみに限られている。もし他人に害を及ぼしたり利益を追求する者には厳しい罰則が加えられる。ほぼ全国民が簡単な魔術を使えるが特に秀でた者は魔術学校で学び、卒業後は隣接されている王立魔術研究所、もしくは王立騎士団で騎士として従事する。

現国王であるリルドア・ヴァン・スーリアス陛下は他国との戦争からこの国を平定させた国民の強い支持を得ていて、陛下自身も温厚でありつつも頭の切れる人物と噂され、国民を大事にした政治を行なう事を公言しました実行している。

彼には2人の息子がいて長男は王立騎士団の第3隊長を勤め、均整のとれた体型や外見だが女に興味がなく執務に明け暮れる日々を送っていた。また、次男は愛くるしく社交的であり魔術に長けているため今後はこの国を担う一員となることが約束されている。

—————

ベッドサイドに花瓶に生けてある一輪のコリの花が優しく光つていてその照明しかない薄暗く静かな一室に真由子の寝息だけが響いていた。

男は足音を忍ばせて近づきギシリとベッドを軋ませ枕元に座る。仰向けになつて子供のように無防備に寝ている姿に無意識に笑みがこぼれる。長い黒髪を優しく梳いていると「んつ・・・・・」と真由子はその男の手へ顔を擦り寄せた。

思わず手を引っ込めようとしたが、頬のやわらかさと温かさにまだ触れていたいという気持ちが勝つた。親指で少しだけ開いているやわらかな紅い唇をなぞった。そして真由子の顎をクツとつかみゆつくりと顔を寄せ、しばらくの間その柔らかい唇と逃げる小さな舌を追いかけ口内を深く食つた。ぴちゃり、ぴちゃりと部屋にはまだ濡れた音と息苦しさから逃れみつとする真由子の小さな声が響いていた・・・

「んむ・・・・ふう」

ハツと我に返ると真由子が苦しそうに身を捩りつとしている。思わず我を忘れていた自分に苦笑いし、まるで無意識に赤ん坊のように吸い付いてくる唇からチコシツと血の舌を引き最後に唇をツツツと撫でた。

顎を持ち上げ上を向かせ、左の首元にある薄い水色の花びらのような形をしたアザに目をやつた。このアザは最初に会った時にはなかつたものだ。指でアザを一撫でして立ち上がり、さらりとした黄金の髪をかきあげ静かに部屋を後にした。

――――――――

コンコン

コンコン

少年は何度か扉を叩いたが返事がないのでゆっくりと、纖細な彫刻されている重い扉を動かした。

寝ている真由子を起こさないよう静かにベッドサイドに寄ると何だか苦しそうな顔をしているように見えないので熱がないかと確かめた後、何か嫌な夢でも見ているのだろうと思い少年は片手をコリの花にかざした。すると白く優しく照らす花が揺れ一瞬だけ淡く光り輝いた後に、ふわりと様々な花の香りが部屋に広がった。この香りはこの世界の貴族の間で流行っている香りだ。

「 げ、あいつここに来たな」

香りを飛ばす前にかすかに感じた違和感は魔術がすぐれている少年だからこそ感知出来た。不快感をあらわに忌々しそうに呟いた。

「真由子さん。また美味しいご飯作ってね？？？？？本当に、
美味しかったんだから」

そう言ってさつきまでの苦虫を噛み潰すような顔からは想像がつかないくらいに微笑み、真由子に甘えるよしお擦りをしてじやあねーと去った。

最後の一言だけはこの広い部屋には少し寂しそうに聞こえた

――――――――――

その頃ベッドに寝ている本人は

じつくりと焼いた餅にウハウハ言いつつ海苔を巻いて砂糖醤油を付けて食べていたところ喉に詰まらせ苦しんだり、デパ地下で買った輸入の花やハーブの香りのジャムをバゲットに付けて食べたりと、食い意地のはつた夢ばかりを見ていた。

マッシツと純粋（後書き）

少し短くてすみません。評価が1000ptを越えました。ありがとうございます！

「いやあ、てしつ。

「…………」

「んみゅー、たしつたしつ

「んんーう…………」

「なあんツー！でででででで

「きやーー！痛たたつ…………」

「なかなか起きない」といふことに不機嫌そうなかまぼこは枕元に座り頬を「秘技！連續肉キュウ起きてパンチ！」を繰り出していた。予想外の起こされ方をした私はしばらくぼーっとしていたが、寝る前（正確には氣絶する前）に起じた事を思い出し慌てて周囲などを見渡した。

そこには40帖はあるつかといふ部屋にはどつしりと重厚な木で出来たテーブルがあり、ソファやベッドカバーなどは白い布に纖細な刺繡が施されていた。シルクやベルベットなのでは……と英國王室のようなスイートルームのような高級感あふれる場所に恐怖を感じた。

なにか異常事態だと脳内信号が鳴っている。

「夢…………かまぼこは猫よね？？」

黒髪の少年を思い描きキヨトーンとしているかまぼこを見つめた後、現実逃避に羽毛布団のよつたな白のフカフカの掛け布団を羽織るとか

まぼこが「にやあん」と甘えて一緒に包まつて来た。この甘え方はかまぼこだ……と考えていたその時、バサリと布団がはがれ頭上から爽やかな声が聞こえた。

「失礼します。エリック様、女性の寝室に入る時期にはまだ早いですよ」

いかにも騎士ですつて感じの茶色の目の茶髪男は、”女性がいる布団をめくる”という自分がしている最低なことを棚に上げ、黒猫を親指と人差し指でつまみ上げた。

「離せよスミス！」

私がが頬をつまんで夢じやないと確かめていると、「ほふん！」という聞き慣れた音と共に黒髪の少年が現れた。やはり黒いローブを着ていて現在は首根っこを掴まれてバタバタしている。

「か、かまぼこ？」

「真由子さんおはよう。ようこそ僕らの世界へ」

かまぼこもといエリック君とやらににっこり話しかけられたがまだ混乱している私に、騎士っぽい人が左手を胸に当て礼をして声をかけてきた。

「おはようございます、ミス。お話の通りお美しい方ですね。いまは混乱してらっしゃるようすで詳細は後ほどお話致しましょう。それより今のお姿をどうにかなされた方が……」

そう言われて自分の姿を改めて見ると、洗剤のCMで見かけるような真っ白のネグリジェから脚は太ももまでめくれていて、V字に開いた襟ぐりからは胸がきわどい部分まであらわになっていた。

「……？」

「私には田の保養なんですけどねえ」

こつちを見ながらブツブツ咳いている男と「スミス見るなよ！」と手を振り回しどうにか視界を遮るうとしているかまぼ・・・・・。エリック君（まだ混乱中）を見ながら服を整えつつ、色即是空！無！など考えビジネスライクモードに切り替えた。

「すいません、取り乱してしまって。私は片岡真由子といいます。」「ちがひませんでしょーか？今の状況やあなた方は・・・・・」

「僕が話してあげるー！」

拳手をして近づいて来たが、騎士さんにまたも襟首を掴まれていた。

「とりあえず侍女を数人呼びますので身支度を整えてからにしますよう」

そう言われ部屋に入つて来た数人の侍女に、私は花が浮かぶお風呂で丹念に隅々まで磨かれるはめになつた。入浴中に少しだけ頭の整理が出来たけど、朝のはずなのにぐつたりだよ・・・・・

ピンクのもつもつとしたドレスを着せられそうになつたので、慌ててクローゼットにあるシンプルな青いワンピースを着て髪を一つに結い侍女たちから逃げた。侍女たちは残念そうしていたので次は要注意だ。

「それでどういう事なんですか？」

現在、朝兼昼食のスコーンを食べながらじつなつた経緯やこの世界のことなどの詳細を聞いた。とりあえずかまぼこはエリック君だとこつこつ事はわかつた。魔術の存在を聞いたし、なんといくつかの魔術を披露してくれた。マジックだと思つていたが、さすがの私も炎が部屋を包む幻覚には驚いた . . .

「真由子さんには魔力はあんまりないから使えないかもしね」と言つことだが、そんなものが私にあつたことに驚きだ。この話はまた後日詳しく述べるそう。

そしてエリック君がこの国の第2継承者といつとも聞いた。しかもここはお城の中らしい。

確かにびっくりしたけど、いきなり継承権など言われてもよくわからない。ほんの数時間前までかまぼこは普通の猫だと思っていたし、魔術や魔力もないものだと認識している世界に住んでいたからよく理解できない。何より態度を変えてほしくないというエリック君の感情の揺れが伝わって来た。

かまぼこって呼んでほしいらしいけど、殿下にさせすぎにやめておいや。かまぼこって魚の練り物だもの . . . しかしかまぼこ

つてこの世界にあるのか?スニスセヨベ、ビツヤツリ輸入品であるらしい。 . . .

そういうえば何か忘れているような??.まあいいか。

今、エリック君とテーブルに向かい合わせに座つて食べているスコーンには木苺のジャム、ハチミツバター、ホイップ、融かしたチョコレートを付けて食べる。なんて幸せ!だつておそらく全部日本じゃバカ高い無添加天然ものなんだから。

どうやらこの世界の食料が私の世界のものと通じているらしい。チョコはチョコとして存在し、スコーンはスコーンとして存在している。和食である白米や醤油などは他国からの輸入品となるらしい。ここスリアス王国とは西欧みたいなものだと位置づけした。この国の言葉も通じるし文字も読めるけどこれは私の持つ魔力のおかげらしい。

私がこっちにこなければならなかつた理由はやはり、煙のようこそ消え誰の記憶にも残らなくなるという「存在の消滅」らしい。たゞがにそれは嫌だ。では記憶を消すというのはどうかと聞いたところ、記憶を消すことや意識を操ることは戦争が終わつたこの世界では大罪となるんだとか。まあ確かに記憶操作などされたら可能性としてだが事実誤認や大量虐殺なんかも安易になる。

あの時のエリック君の少し申し訳なさそうな顔が浮かんだ。連れてくるところのことはもう帰れないということらしい。

怒りを感じずにはいられなかつたが、あの世界についても自分は誰にも必要とされないと感じていたから良かつたのかもしれない。英臣ともなんだかよくわからぬままになつたけど、この世界の話を整理しているとどうでもよくなつた。いや、正確には多くの情報を得ることで無意識に思考がそつちへ向かないようにしていった。みんな誰しもパートナーがいて、そして家庭を作る。それらをとつてとてつもない「義務」や「労働」に思えてしまう自分はなんでいるのだろう。

「どうかしました？」

ヒリック君の隣りに立つスミスさんが色々話してくれながら気遣つてくれる。

「あつ、こ、や、ちょっと疲れちゃつて」
慌ててこまかして笑う私の得意技。

「とりあえず、あなたの身元は隠しこの密室に留まつていただきます」
なにか欲しいものやしたいことなどありますか?と問われ、しばらく考えたのむ、

「まず、戸籍など個人の証明になるものや働く職場、住む場所の手配をお願い出来ますか。多分どこでも生きていけると思ふ。」

思つので、と繋がる言葉はヒリック君の手で遮断をてしまつた。

「ダメ!…ダメだよ!僕、真由子さんがこなきや寂しい……」

「 かまぼこ ． ． ． 」

思わず呟いてしまつ。お願い！と言われ、ギュッと抱きつかれた。
まるでコアラが木から落ちないよつこじてこるよつだ。

「 ハリック様、 真由子様が困つて ． ． ． こつ ． ． ． ！」

ぴたつとスマスさんの動きが止まつた。どうしたんだ。

「 じゃあ僕の遊び相手でいいでしょ？ この国のこととか僕勉強して詳しいからいっぱい教えてあげる。政治や経済の流通、暮らしていぐなら貨幣や生活の知識も必要でしょ 」

「 下からおねだり、まるでこしゃーん！（ゴハン！）と言われてるみたいでぐらついてしまつじやないか。確かにこの国のことばなないと生活していけないから、これは理的だ。 」

「 なつ言つてくれてありがと。お言葉に甘えてこちりで学ばせてもらひつね。よろしくね。かまぼこ、もとこハリック君 」

まるで太陽のように笑顔を向けてくる。あまりの可愛さにほお擦りして頭をなでていい口いい口しました。

その頃、少し離れた所では額に少し汗が浮かんでいるスマスが「 は、腹黒 ． ． ． 」と息も絶え絶えに胸を押えていた。

やつぱつ何か忘れてこるよつな ． ． ． ． ． ？まあこつか ！

客室滞在（後書き）

確實に忘れ去られた存在がいますね。
次は出てきます！（変態ヤローが）
ありがとうございました。

そんなこんなで夕食時間になるまでエリック君と話をした。ここも現在春で様々な花が咲き乱れる中庭のテラスでお茶をしていた時、爆弾発言が飛んできた。

「しゃ、社長が第1継承者！？」

思わず紅茶クッキーを吹き出してしまったが護衛中のスマスさんが見ない振りをしつつそつとハンカチを差し出してくれた。申し訳ない . . .

「うん。僕の腹違いの兄で名前はオルベルトってゆうんだよ、オルベルト・ヴァン・スーリアス。ねえそういうばしゃチョウつてどういう意味なの？食べ物？」

社長の意味を教え仕事ができて偉そうな態度だったから、と言つたらピッタリだと腹を抱えて笑つていた。

分かつたことは王様の側室・リリア様の子供が社ちょ、いや、オルベルト様で年齢的にも第1継承者。

そしてエリック君は正室の子で第2継承者だが国政に興味はない模様。正室のアマーディア様は身体が弱いようでよく寝ていることが多いらしいけど . . . 本当に一夫多妻制つてあるんだ。何かショックだ。大まかな歴史や経済状況などを聞いた頃、肌寒く感じたので部屋へ戻ることになった。

エリック君は今日、目を覚ました私が不安にならないよう魔術学校を休んでくれた。用事があつてこれから学校へ行くので夕食は一

緒にそれそつにないと寂しがっていた。

部屋に入ると栗毛色の侍女がミルクたっぷりの温かい紅茶を入れてくれた。

実際私はそんなにパニックや不安にもなっていない。今までどんないじめや問題も自分で解決して来たせいとかどこか自分を冷めて見つめているという感じ。実感がないのかもしれない。なんでこんなに自分は強いんだろう？

「真由子様」

ハツとすると私と同じ年くらいの先ほどの侍女が、肩までのふんわりパーマを揺らし微笑んでドア付近に立っていた。

「わたくし本日から真由子様の専属侍女のミリアリア・ベルと申します。オルベルト殿下から真由子様のお世話を承りました。どうかミリアと御呼び下さい」

専属侍女！さすがの私も遠慮したい。侍女なんか付いたらお風呂に1人で入れないという羞恥を再度味わうことになりそうな予感がした。それに殿下って社長じゃん。今までただの「猫」としか接してこなかつたのにいきなり殿下扱いしなきゃいけないのに違和感がある。エリック君は・・・・かまぼこだし子供だし甘えん坊だから、なぜかあんまり違和感はなかつたけど。

「あ、いえ。侍女なんて申し訳ないです。ただの一般人ですので
気遣いなく . . . 」

「い、いえそんな！－わたくし真由子様のお世話が出来て光榮です！
今朝見習い侍女が足を滑らせてしまった際、あの場にわたくしもい
ましたの」

「そうだ。お風呂場で（無理矢理）エステをされていたところ、石
鹹で足を滑らせて転んだ女の子がいた。その子も周囲の侍女も「粗
相をしてしまい申し訳ございません」と慌てて謝つていたが、私は
とっさにバスタオルを巻きその子の足を見て冷水で冷やした。少し
腫れていて捻挫の可能性があるのですぐに冷やした方がいいと応急
処置をし、その後は冷やしたタオルを足首に巻き付けてポカんと立
ち尽くしている侍女たちに引き渡した。

「ミリ亞さんあの時いらつしゃったんですね。あの子は大丈夫でし
たか？肘の打ち身も気になりますし . . . 」

「ミリ亞さんを見ると身体を震わせ涙をレースのハンカチで拭つて
いる。え、な、なんで？思わずあたふたしてしまう。

「真由子様はなんとお優しいんでしょう！さすがはオルベルト様が
気にかけ . . . あついいえ。あの子は肘の打撲と足首の捻挫で
2、3週間ほどで回復致します。真由子様がすばやい処置をしてく
ださったおかげですわ。あと、わたくしは侍女ですのでビックリか敬語
は控えミリ亞とお呼び下さいます」

ん？なんか途中で変なことしゃつべてたような？

「そ、そつ。よかつた。じゃあミリシアと呼ばせていただきますね」

「それに加え昼食を御出しする際に私たちにも丁寧なご挨拶を述べてくださいました。真由子様の御付きを選定するにあたり立候補者がものす」
「……」

ミリア曰く、昼食後の私付きの選定会なるものの倍率がすごかつたらしい。社会人として普通にしているつもりなんだけど、この世界のしかもこの城内で客人としては私はとてもめずらしい人種みたい。確かに、こんな某ネズミの国の数十倍はあるう城に客人として来るのも貴族ばかりで世話をされることが当たり前の人達が多いだろ？

「さあ、お話はここまでに致しましょう。これから夕食のお時間となります。本日はオルベルト様がご一緒にとのことですので御召しかえさせていただきます」

ジリジリと距離をつめて來たうつとつした田のミリシアに、裸にされ着せられ髪を結われ化粧直しも完璧にさせられた。

――――――――

「失礼します。お連れ致しました」

私は大きな扉の前まで連れて行かれるとミリシアはそつとつてその

重そうな扉を開いた。壁に侍女が何人か控えていて、シャンデリアが中央に浮かぶ広い部屋には長いテーブルがありその端に1人の男が座っていた。

スタバで私をひっぱつたスーツ男はまさにこの金髪男だ。それに社長と同じ気高い雰囲気。シャンパンゴールドの耳までの髪と紫の瞳はまさに社長を人間にした感じぴったり。

ミリアに促され席に着くまでの間、穴があくくらい見つめられたたまらない気持ちになった。会社用スーツか家でのルームウェアじゃなくてこんな姿だからだろうか。

いま着せられているのは深紅の膝下までのマーメイドラインドレス。膝からは細かいプリーツが入つていて歩くと揺れてとても綺麗で気に入つたが、肩が開いていて谷間、ギリギリなのだ。同色の高いヒールで歩くのが大変だから嫌だと言つたけどこれが普通だと言われ納得せざるをえなかつた。私の行動範囲は狭く、何より一国の文化は簡単にわかるものじゃない。その後片耳の近くで長い黒髪は結われ反対側の耳近くで白いラナンキュラスのような真っ白い花で留められた。化粧だけはせめて薄くと土下座しどうにか準備が整つた。

殿下といえどまだにayanこのイメージである社長と食事というのに・・・すでに疲れてしまった。色々あつてキャパオーバーが近いのかな。

「片岡真由子です。本日はお食事のお招きありがとうございます、

オルベルト殿下。それとの国での滞在に関してとても良くしていただき感謝しております」

「ビジネスモードに切り替えて話し始めた私をまだ見つめていた殿下は、その美しい顔の眉間にシワを寄せテーブルの前で組んでいた手を持ち上げ顎を置いた。前菜が運ばれてワインを注がれ終わった時を見計らい、金額を退出させた。

「改めてだが、オルベルト・ヴァン・スーリアスだ。弟が迷惑をかけたな」

前菜はチーズが練り込んであるパンと春野菜のサラダか。なんだか見た事ないような紫色の星形の葉っぱもある。「一む、と皿に皿をやつていると皿をかけてきた。恐らくこの国に強制的に連れてこられたことに対するだろ?」

「いいえ、起こつてしまつたことはしようがないです。それに言葉も文字も通じますし、殿下やエリック君が手厚く保護してくださるおかげで今の所何も不自由はございません」
あ、思わずエリック君とか言つちゃつた。様、を付けるべきだった。

「……異界では世話になつた」

食事にはあまり手を付けずワインばかり飲んでる。なんで不機嫌そうなんだろう。食事に招いたのはそっちなのに。形式的に必要だったのかもしれない。私もワインを飲む。あ、この赤ワイン美

味しい。

「いいえ。ただ猫を拾つて世話をしただけです。まあ、まさかこの世界に飛ばされるとは思つていませんでしたが」

渋い顔になつたようだが、こんなことにいきなりまき込まれたんだから少しだけ攻撃してもいいだろう。エリック君はまだ小さいので面と向かつて責任を負わせたり出来ない。こればかりは彼の現在の年齢を考えた判断能力の問題だ。

「そういえばあのスープはどうされたんですか？私をスタバから連れ去つた際の」

扉がノックされメインが運ばれて來た。ステーキとマッシュポテト、豆のスープだ。

「すたば？ああ、男といたあの店のことだな。あれは魔術でそつちの世界の服装を真似ただけだ」

そう言つて彼は豆のスープを一口とステーキを数口食べただけでまたワインを飲み始めた。

「確かに私が住んでいた所には会社がいくつありましたしね」

「私はもくもくと食事をした。味があまりわからない。恐らくなんだか疲れているのだろう。あまりしゃべりたくない。向こうも何をしゃべつていいかわからないかも。社長、猫のまでいてくれればよかつたのに。そう言つてやろうかと思つたがさすがにマズいかなと思いやめた。大体、仕事相手やフェミニーストな人なら平氣だが、私は男の人が苦手だ。」

沈黙の部屋に運ばれて来たデザートは肉料理の口直しにいい柑橘系のシャーベット。リキュールが少し入つていて大人の味がする。あまりの静けさに私はイライラしてきた。

「なにかしゃべつてはどうですか？」

すると今までの謙虚さが嘘のようだ。

「お前、この俺がめずらしく素直に謝罪の意を示したと言つたのに。猫だった時と態度がえらい違うな。どつちが本性だ？」

などほざいてきた。一人称変わつてるし！

「どつちも私は。だいたい殿下に関係ありません

私は気を取り直しワインをぐいっと飲んだ。

「どうか、面倒くさい女だな」

二重人格な殿下は相変わらず優雅な仕草でワインを飲んでいる。

「女だからってなんだつて言うんです。だつていきなり飛ばされてきてしかもこんな場違いな所にいる。私の怒りや絶望はどこへ行けばいいんですか！？私はプロジェクトに関わる可能性はもうない。向こうでの恋愛もすべて意味のないものになった。友達にも家族にも・・・会えない」

なんだか急に色々と不安になつて涙が出た。そう、私は酒に弱いのにワイン3、4杯は飲んだ。お酒を飲むと「強い私」は「弱い私」になる。

私は長いテーブルの向かいにいたはずなのに、気付けば「ああそうだな」「へえ」などという殿下の隣りに座り、グスグス俯き泣いて愚痴を言った。

頭もポンポンしてくれたしいい人なのかな。猫になつてといつたら猫になつてくれたので「社長ーー！」と抱っこして撫で回した。いやつにいやう言つてたけどわかんないよ。

そして

私の記憶は曖昧になつた。

またか！

食事会（後書き）

人気のかまぼこ（笑）の小話書きましたのでよければ活動報告を「」
覧下さい*

猫の甘えん坊丸出し気質なのがかまぼこですね。社長は優雅なツン
デレ猫気質のつもりです。

散々な日々（改稿）（前書き）

R15です。ご注意ください。

散々な日々（改稿）

小さい頃、私はグリーンピースが大嫌いだった。だからいつもシチュー や ハヤシライスに入っているのを取り除いては怒られていた。

でも大学生になって一人暮らしを始めた頃、某デリカテッセン（サンドイッチや持ち帰り用の西洋風惣菜を売る飲食店）でグレープシードオイルで炒められたベーコンとビーンズの中に入つてのを気付かずに入つて気付いた時には好きになっていた。無性にグリーンピースご飯が食べたくなったこともあるくらいに。

く嫌いなものはいつか好きになるゝそんな夢を見ていた。

なんだかあつたかいものに包まれている。

目の前の中に頬ずりすると背中をギュッと抱きしめられた。グリーンピースご飯に塩をふつて大事におにぎりにしているようにギュッと。

優しく頭を撫でられている。最後に綺麗なおむすびの形に整えるように。

でも私はおむすびに食べられたみたい。だつて口が塞がつて息が

出来ないから。

息をしようと口を少し開くと柔らかいものが深く入り込んで私を貪つてゐる。おにぎりに食べられるのはおかしい。私が食べるはずなのに、と頑張つて私も口を開けて舌を絡ませる。チュッと吸つて逃げられないようになるともつと深くまで貪られてしまつ。

「んう、ふあ……」

逃げようとしてももつと強く抱き込まれてしまつ。

「はつ、む・・・・・あつ」

この心地よさが現実か夢かわからないまま、また何も見ない世界へ漂つて行つた。

ちゅんちゅん。バサバサ。ピーーチチチ・・・

田の前にわいわいとした金色の毛並みが見える。社長だ。ちゅつと両手で温かい毛並みを抱き寄せスリスリ頬ずり。

むぎゅー。かわいいな社長。

その時ぐぐもつた低い声が下から聞こえた。私は目をつぶすら開

けたまましがりや社長を簾で回していた。

が、もだもだわざわざ腰やお尻を簾でられてこのよつな気がする……。

「え！」

慌てて社長を引き離した。私は見知らぬ部屋で人間であるオルベルト殿下を抱きしめていた……。うわ、すりへしすり怒った顔してゐるよ。起き上がった社長から睨みつけられた。

「うー頭いっつたあ……。」

思わず一日酔いの頭をかかえる。ゆっくりと起き上ると白い衬衫がハラリと落ちる。私はどうしたんだつけ?・記憶がない。

「しゃちゅ、いえ殿下。すいませんがこれま、ここは一体……。」

「ああ、頭が痛い。」

「ふつ、絶景だな。言つておぐが未遂だ」

ほどよく筋肉が付いてしなやかな上半身をさらしてくる。絵になりますね。そんな殿下は目を細め私を眺めていた。

未遂?絶景?嫌な予感がして自分を見ると、ハダカ!!

「な、なんで!?私昨日、えっと…や、やつてないですよね……。」

胸を片手で押さえシーツを引き上げた。どうやらパンツははいてたのでハダカではない。とはいへ不安は拭えない。

「お前は飲んだくれた後、服がキツいと自分で脱いだんだ」

「こんな悪酔い一度もなかつたので自分でビックリした。

「……わかりました。」迷惑をおかけして申し訳ございません。
服を着ますので少しあちらを向いていただけますか

バサッとバスローブが投げられたがこれを着ひつてことだひつ。
殿下はわざと回じものを羽織りスタッフ歩いていった。

私はあることに気付いて声を荒げた。

「ちよ、ちよっとおおおおーー！」

だつて赤い斑点、いわゆるキスマークが胸元や一の腕にくつきり
とついている。嫌な予感がして思わずシーツを捲つてみると何故か
太もものき、きわどいところまで！ひつ！足首にまで！鏡を見て
ないからわからないけど、恐らく首にもつけられているだろう。

ん？しかもなんか口内や唇がぷつくつとしてたり違和感があるよ
んな……

歯に手を当ててみると、クックッと笑い声が聞こえた。

「お前はどいつも柔らかいな」

そう言こ置いて肩を震わせるやつの姿は扉へ消えた。

「INのヘンタイ殿下！……」

しぶりで怒りとパニックでベッドにもぐつていたが、迎えにきた

ミコアに連れられ部屋へ戻った。なんだか微笑を浮かべている。

お風呂が隣室にあるのでさつさと逃げた。が、魔力がないとお湯がでないためミコアに入れてもうう。そしてドレスの着付けの際は必然的に裸を見られる訳で……

「やつぱりーさすが真由子様！」とか「あの殿下が……」
興奮状態のミコア誤解を解くのが大変でした。

—————

それから数日は殿下と会うことはなかつた。公務の仕事が忙しいらしく行動の時間帯が違うのだ。

しばらへ会いたくないのと、うづよかつた。いつの間にみんなに……背中も含め何十個あるんだ。

私はしばらく浴室と中庭で過ごした。

サンドラ女史にこの国について色々教わるためだ。サンドラ女史は、老舗の香水店の跡を継ぐまで魔術学校に勤めていたとい。今回はエリック君の口添えで私の専属教師になつてくれた。なんと曰那様はこの城に仕えているんだそう。いつかお会い出来るうなのでとても楽しみにしている。

ちなみにエリック君は私の首、腕にあつた赤い痣をめざとく見つ

けると、にっこり笑つて消えた。一体どこへ行つたんだろう？

私にも魔力があるので魔力を表に引き出す練習をすることになつた。魔術、財政、法、生活様式、マナー etc。完璧な女性だ、エリック女史。そしてスバルタ . . .

く何をどうしたいかを頭に思い浮かべ、力をその一点に集中させるへほぼ全国民はそうやって魔術を使い生活している。簡単なようで難しい。

害をあたえるような魔力は禁止、もし法を犯せば自身だけでなく家族など関係者にも仕打ちがある。絶対に魔術で犯罪を犯さないため、罰金や牢獄以外にも残酷だったり厳しい刑罰がある。

が、私はどんなに念じても何も起こらない。何田も何田もやつているのに。女史も困惑気味だ。

「真由子様の魔術はもしかしたらまだ発動される時期ではない可能性があります」

中庭で女史とお茶をしていた際にそう言われた。

「どういふことですか？」

紅茶を飲む。今日はレモンティーだ。ほんのりと蜂蜜が入つてい

る。

「魔力は普通なら、6歳頃の子供は使えます。本当に羽のような軽い物を浮かせる程度ですが。それから初等学校へ通い魔術に付いての法など様々なことを学びます。そこで特に優れていると判断されたものは魔術学校へ移るということです。」

確かに小さい子は手の届かない物をどうとするけど動けない。だからその時初めて微弱の魔術が発動される。

「つまり、羽も浮かせられない私は6歳児未満なんですね」
田の前のバタークッキー、紅茶、そして練習用の羽を見つめながら思わず呟く。

「ええ。そうなります」

女史、軽く傷つくから目を見てハッキリ言わないでー。」
うつ見えても仕事もバリバリしてきたし、この国のこともうごい勢いで吸収してる。なのに魔力がないなんてどうしようもない。

私はどうなるんでしょうか . . . 。

たまに一緒に食事をする機会があるエリック君には食後にかまぼこになつてもうつ。テーブルに突つ伏していると、たしたしつふにと頭をたたいて「にやあ」と鳴いてくれるんだ。目尻が下がるのは仕方がない。エリック君ももちろんかわいいけど。

たまに猫の姿になつてやつてくるから一緒にお風呂に入る。私が日本でお風呂で洗つてあげたらす「」く氣に入つてくれたみたい。マッサージ付きだと尻尾を動かし「んみやうつ、なーう」などたいそつご機嫌だ。湯船で泳ぐ子猫つてかわいらしい。人間の姿だと一緒に入るのは抵抗あるけど猫の姿だしね。

エリック君曰く、この国や城には猫が多くいるらしい。魔術を秘める動物だから。

猫と言えば、今度ジンジャーホールを作りつかな。

生姜、水、ハチミツ、砂糖、鷹の爪を鍋で煮込む。生姜が透き通つてきたら、レモン汁、シナモン、あればグローブをいれる。あとはソーダで割つたりしてピリッとした辛さを楽しむ。エリック君には猫の姿で飲んでもらおう。ハインラインの小説「夏への扉」に出てくる猫がジンジャーホールを飲むよつ。

あと、ここには大きな厨房がいくつあるようだから使用許可をもうつ预定。ストレス解消だ。

ここへ連れられたことでもぐの物を無くしてしまつたけれど、こんなにいい待遇をさせてもらつてゐるんだからここ飯でも振るまいたい。あの変態にもお裾分けしよう。城の「」飯に比べ質素だけど、エリック君にも「また作つて！」と田をキラキラさせて言われたしね。私も気付いたんだけど、この国の料理は結構ワンパターンなものが多い。輸入も盛んで食材が多いならもっと活かせばいいのに。

毎日が勉強で大変だけど、いつやって前向きにならなきや。

散々な日々（改稿）（後書き） (あま書き)

ヘンタイが出てきました。

ジンジャーH-ールの作り方が中にに入るスペースは様々ですので
好みでどうぞ。

夏への扉 <http://ja.wikipedia.org/w/index.php?title=%E5%A4%A7%20%E9%96%93%20%E3%81%AE%20%E6%9C%8D%20&oldid=4200000>

秘密の会話（前書き）

side ハリック（かまぼこ）

「みぎゅー」「やうーん」「うう」
まさかこんなに早く探知されるとは思つてなかつた。それだけ魔力を消耗したのだろう。こんなもののために異界渡をしたのではない。焦つてペチペチ叩いていると兄さんは氣怠そうに目を開けた。びっくりさせないでよ。

しばらく真由子さんが看病をしていた。僕は、なんだかいつもと違い力の無い兄さんを観て少し後悔していた。が、その後あまりに「いやうう、みやう」（何をバカなことをしているんだとか帰るぞ）とか言つてくるので無視だ。うるさい。

いつも過保護すぎなんだ。それに僕、知つてるんだ。

僕は正妻、兄は側室の子。でも僕は王位継承権は第2位だからつていつも微妙な扱い。母様が身体が弱いのは仕方がない。

そして僕は、当たり前のように力を持つ側室に妬みを持つ。そんな女の子供である兄を妬むのも当たり前。なんたつて母様を口陰の存在にしたんだからな。

兄さんは今、先の大戦後の各地での争いの沈静化・高官や貴族間などの後継者争い・金融政策など、最も重要で大変な問題をものす「」に早々で解消させよつとしている。

・・・・・僕が成人して即位する前に。

恐らくあまり眠っていない。あまり食事も食べていない。たまに薬を飲んでる。どんなに余裕があるよう見せても、僕は知つてゐるんだ。

そんな兄は疎ましい存在であり、そしてまた・・・・・

それにしても風呂場で洗われて「」は見物だ。「フーッ！」（見るな！）と言われても、ねえ。まあ兄弟そろつて女人の人と入浴つて変なシチュエーションならさすがに普段冷静な兄さんも動搖するか。ニヤフニヤフツ。これはスマスたちに見せたらさぞ滑稽だろうと想像し、異界土産にすべくこつそり魔術を使つた。映像を記憶させゐるんだ。

真由子さんが身体を洗つてゐる間、

「真由子さんつていうんだよ。片岡真由子さん」

「兄さんより2つ年下の25歳」

「身体柔らかいよね。肌きれいだし」

「なんかいつもいい匂いがするんだよね。なんでだろ?」

「料理が美味しいんだ。城の食事とは全く違うしへたしたらそれより絶品」

など色々と教えてあげた。水音で真由子さんには「にゃあーみやうー」と言つても聞こえないだろうから。

あつ、兄さんズルい!僕も真由子さんとお湯に入りたい!そしていつものように抱っこしてもらつた。ゆっくりとお腹や背中を撫でてくれる。思わず顔を谷間にスリスリしてしまひ。この柔らかい感触がいいんだよね。

「なうーつ」

極楽極楽。

今夜は僕が寝る特等席(特等ベッド)を兄さんに譲りひつ。あ、い
いこと思いついた!

—————

「真由子さんがコンビニでとこへバターを買いに外へ出た瞬間、兄さんは静かに魔術を解いた。

「なぜ異界渡りなどした？それになんだ、あの女に対する態度は」怒り心頭の様子は、組んでいる両腕の握りしめられたシャツの皺でわかる。

異界渡りは最高難度の魔術だ。その上にビビへ飛ぶか分からない。大抵なら失敗して自分たちの世界のどこかだが、魔術が高すぎる者は魔術の無い世界へ飛ぶことがまれに起こる。そうなれば位置を特定するの探知は難航し、異界渡をした者と血の繋がりがある者でないと連れ戻せない。

「だつてさ、ヒマだつたんだ。学校の課題も終わってるし。ギルが探してた？説教が待ってるだろ？」

自分も静かに魔術を解く。全然関係ないギルを巻き込んでしまったことやあつちへ帰った時のことを思い浮かべると少し憂鬱になつた。

今まさに、耳と尻尾が付いていれば確実にヘニヨンとなつている。

「真由子さんはさ、ご飯を作ってくれるんだ。それに優しい人なんだよ？心からね。だからいいんだ」

城に住んでいれば汚い人間を必然的に田にする。たまには自分の存在を無にしなければならないこともあるし、繕わなきや負ける。

そんな中でこんなに温かに包み込んでくれる人はなかなかいない。自分を曝けても大丈夫と思える人間なんて滅多にいない。

まあ真由子さんは猫を飼つてる感覺なんだろうけど、僕は離したくないしね。

「単なる遊びではないだろう。何が目的だ？」

怒りで蒼い顔をしている兄はその強い瞳で心の奥底を探ろうとする。確かに遊びではないつもりだ。この異界渡りは発動させた者はかなりの間、心身を休めなければならぬほど魔力の消耗を費やす。

「まあヒマだつたつて言つてるじゃん。まあお迎えが着たしそろそろ帰るよ」

「じゃあい・・・・・『ただいまー』」

今すぐ、といつ言葉に真由子さんの声が重なる。ナイスタイミング！

ぼふんぼふん！

舌打ちする兄。魔術がバレたら面倒くさいもんね。

「いやうん、んにゅう」

お帰り、真由子さん。早く美味しい』飯つくつて？

—————

少しだけ時を遡る。

朝焼けが小さな窓から差し込んできた頃、小さな黒猫はこっそり魔術を解いた。

少しだけ背伸びをした後、そつと真由子の青い水玉模様のパジャマのボタンをはずた。そして疲れのあまり爆睡している社長をパジャマの中に寝かせまたボタンを閉じた。

寄り添つて寝る姿に田を細める。

空を自由に飛ぶ鳥たちの鳴き声が聞こえてきた。自由に、何ものにも縛られるものなどなく。

「兄さんはもっと自分の為にも生きるべきだ」

自由にするため、自由にする存在を見つけるために僕は異界渡りをしたんだよ。これはエゴかな？

疎ましい存在である・・・・けれども、それ以外の何とも言えない存在だ。人間は感情すべてに言葉なんか付けれれない。そんな簡単なものじゃないよ、1人の人間が存在することって。

しばらく眺めた後また猫の姿に戻る。いつか兄と真由子が本当に

寄り添える立場になればここと思いながら。

*

そしてこれももちろん、お風呂の時と回り、 映像記録済みだよ？

一やフニヤフツ

秘密の会話（後書き）

真由子前限定で「兄様」といふふるヒリック君が好きです。次回
はside オルベルトです。

いつもご訪問ありがとうございます*

側にいたい（前書き）

side オルベルト（社長）
少しだけR15です。お気をつけ下さい。

多くの成人男性が着ているスーツを真似て着ていると周囲が振り返る。特に女どものチラチラ窺う視線が鬱陶しい。あまり目立ちたくないため不本意だが猫になつて探していた。

異界渡りをして2日目、魔力の消耗が激しく身体が鉛のように重い。常に探知魔術を張り巡らせている。また猫の姿の方が術を施す面積が少ない上、万が一見つかつた時猫なら即座に逃げられるので姿眩ましの魔術で姿を見られないようにした。そして日々の激務もあり疲れがピークに達し目も開けるのも億劫になってきた。小道でうずくまっているとエリックの防御魔術の気配がした。同時にふんわりと香る魅惑的な香り。

そこで意識が途切れた。

――――――――

国民や周囲の皆には俺が王位を継ぐと思われている。それもそのはず、王位第1継承者としての国政や外交の責務、そして政治を行う宰相の補佐として慌ただしく国政に関わってきた。

決して貧しい国ではない。むしろ大国で領土も広く貿易も最も盛んだ。だからこそ平定と発展を同時に進められる。

戦争に対する騎士団や魔術団は残つてはいるが、無益な争いは起つつもりはない。いつ開戦を仕掛けてくるか分からぬ好戦的な

他国への備えだ。今後のことを考えると出来るだけ争いは控えたい。そのためには何でもするつもりだ。

スー・リアス王国の成人は16歳。あと数年で俺は出来るだけ国を安定させなければならない。理由は誰にも語るつもりはない。そのことを考えると、数年前に夜盗に襲われて負った古傷が疼く……

――――――――

弟のエリックは魔術の才に特に優れたうえに、薬学や人体学にも精通している。なのにいつも周囲を混乱に巻き込む。そんな所に今回の騒動だ。悪夢なら目覚めて欲しい。

そう、これは悪夢だ。スプーンで粥や栄養補給させられている、見知らぬ女に甲斐甲斐しく。

「お身体大丈夫ですか？」

にこりと笑つてゆつくりと撫でてくる女の後ろからは、黒猫の視線。尻尾を揺らし面白い物でも見るような眼差し。ややこしいことになる前に早く連れて帰らなければ。

風呂へ入れられる際はさすがに驚き抵抗したが、大人しくせざるを得なかつた。この女は見かけによらず強引だ。まあ気の強い女は

嫌いではないが。

エリックがいらない情報を流してきた。

確かに良い身体をしている。

スレンダーで色白、胸は豊満とはいかないが大きく柔らかかつた。長い黒髪やすつきりした目や口元が艶やかで優げな雰囲気を醸し出している。おそらく無意識なのだろうが、現在、猫の姿である自分たちに対する扱いなども丁寧だ。

先ほどの粥がとても美味しかったことを思い出した。シンプルな見かけだったが素朴な優しい味。城での食事の概念はただの栄養摂取だった。なのに今回の粥一つにしても、心惹かれる何かがあるような気がした。

「ねねね、気に入ったでしょ。真由子さんのこと」

「……明日にでも戻るぞ。ギルが首を長くして待ってるはずだ」

「げえっ

田の前の猫は「んぎゅう」とまるで蛙のひしゃげたような声を出した。

そんな弟はこの女にはひどく執着していた。身をすり寄せて甘える仕草をする姿に驚きを隠せなかつた。

大抵の場合ギルや俺など、近しい者の前では嫌な顔をしてくる。スミス曰く、「悪魔」「腹黒」だそうだ。また、臣下や侍女など他の

人に対しては、一見かわいらしく見せているが、時折恐ろしく冷たい目をしているのを知っている。

一体この女になにがあるとこつんだ。

その理由はすぐに分かった。ヒリックとの女は、どこか似ている。数日過ぎしてどんな人間か察し、共鳴した部分があるのだろう。

それだけではない何かもある。半ば強制的に女と寝る羽田になつた際、夢も見らずに安心して寝れた。首を傷つけてしまった代償に、回復術を込めて血を舐めた瞬間、今まで香っていた匂いが一瞬だけ強くなつた。もしやと思ったが、可能性はかなり低いため気のせいだと思っていた。

段々と浮かび上がってきた首のアザを見るまでは。

—————

「連れてくればお前は帰るんだな？」

「わかつてゐる。だから早く行けよ。あの雰囲気は真由子さんに絶対よくない」

女のことは別にどうでもよかつたが、女を店内から連れてくれば

異界へ帰る、とこう取引きをした。なのでこの世界の服を着て、店の側の暗闇から、明るく照らされた店へ入った。

が、あの女は今にも涙が出そうなのを必死で我慢するように見えた。細い一本の線が張りつめたようだ。向かいの男はそれに気付いてないのか、少しだけ余裕が見える表情で笑っていた。突然腹の底から怒りともいえる感情がせり上がってきた。足音を鳴らし近づく。

「真由子。迎えに来た。帰るぞ」

この男はそんなに大した器じやないと改めて見て思った。多くの臣下や民と接するのでそういう感覚が身に付く。一瞬で見分けられなければ命を奪われる危険だつてある。偽善や悪意、もしくは何も持つていない人間は上辺にも表れるものだ。

ぽかんと見上げてくる女の華奢な腕をつかみ、腰を支えて連れ出した。そう、弟とのただの取引きのためだ。

店を出ると女は気を失った。男とどんな会話をしたのか分からなかつたが、うつすらと涙が浮かんでいた。この軽い身体を思わずそつと抱きしめた。そして……自分の勘違いでバレた。

「よかつたね、兄さん。一度と会わない男なんかに牽制しつつ店から連れ去るなんて、何気に気になつてたでしょ？」

この騒動の元凶なうえ、女の前で「兄様」と呼んで猫かぶりする弟に殺意を覚えた。

よく氣絶するこの女を連れて帰つた後、女が寝ている部屋へ入り、

顔を眺める。エリックが執着する人間。あの存在の可能性がある女。そして、なぜだか放つておけない存在。

その感情の正体がよくわからず、顔を撫で回し思わず口づけた。放つておけないだけじゃない。側に置いておきたいと思つた。何を考えているのか知りたい、笑つて喜ぶ顔が見たい。どんな顔でも見たい。その瞬間、思わず欲望を秘めた舌が相手の口内へ深く侵入させてしまつたが、心地よさに背筋が震えた。無意識に続きを欲している。

何度かこの女が作つた食事を食べたが、また食べたいと思わせられた。プライドや義務で作る城専属のシェフの料理より、自由な組み合わせで味の変化を楽しむ料理に惹かれる。そしてなぜかこの女の側にいるといつも見る悪夢も見ず、頭痛もなくゆっくり眠れた。連れて帰つたのは、術がバレたからもあるが、またあの食事を作つてもらう為。側にいさせる為。そして・・・・エリックの為でもある。

苦しそうな女の声で意識を引き戻した。深い口づけが名残惜しく感じたが、エリックも訪れるだろうと早めに引き下がる事にした。

溜まつていた仕事が片付いた頃、女を晩餐に誘つた。贈つていた赤いドレスは細い腰を際立たせてより一層、女性らしく見せていた。異界では優しく笑う聖母のような女を、シャンデリアの光が女の姿を妖艶に変えていた。

そして、聖母など思つた自分を取り消したくなつた。
なぜか俺にだけ突つ掛かつてくる。エリックのことや、バレて強制的に連れて帰つたことなど反省はしている。もう一度と向こうの世界へ戻れなくなつたことで多くの物を失つてしまつ状況にもさせた。

いきなり怒つてしまいにはグズグズと泣き出し猫になれとまでぬかしてくる。酔つぱらいに何を言つても不機嫌になるから猫の言葉で「なう、んにやあ」など分からぬよう突つ込んでいた。さんざん上司や仕事、英臣という男や友人の話などをしていたが、しまいには勝手に下着一枚を残しほぼ裸になつた。一体何の拷問だ？似非聖母には飲ませすぎではならない。

人間に戻り移転術で自室へ運び、少しだけ味わいたいといつ氣持ちと、目が覚めた時の反応の見たさに所有印を刻む。ベッドに横たわる女の綺麗な白い肌を撫で、ピクピクと跳ねる身体を押さえつける。

「んむ・・・はあん」

アザがある首を一警し、柔らかな胸や色香を漂わせる背中など全身に印を刻んだ。段々と大きくなる惱ましい声が上から聞こえてきて自制が効かなくなりそつになる。

「真由子、か」

「この女が望んだよつて、この世界で生きっこなるよう教養などの面で一から教育してこへつもつだ。」

「んつ」

「幸せやつて眠る女に、最後は何度も啄むよつなキスをして抱きしめて眠りについた。また悪夢は見なかつた。」

*

「真由子さんのおのアザは何? 頭にまでキスマーク見えたんだけど」

「せつときからグチグチと、お前は何をしこきたんだ? それがビツじた」

「意識の無い女に手を出すなんてサイテー。それってどうなの。犯罪でしょ?」

「痛い所をつかれ返事に窮す。」

その後、真由子には匂がでて、レスや宝石（ちなみに主に赤や深紅

の) が贈られたといひ。

側にいたい（後書き）

ホーー禁ですね、もひ。ビーを舐め回しているんだか。

「この世界に来て約1ヶ月経つて色々分かつてきただ頃、中庭以外の場所へ許可が出た。でも魔術がまだちつとも使えないため、誰かと一緒に行動することが絶対条件だけど。バリキヤリだった私がらすると、かなり屈辱だ。穴があつたらはいりたい、むしろ掘つて飛び込みたい。

でもエリック君のおかげで小さな調理場が使えるようになつたので、気分が軽くなつた。城に滞在してゐることは国賓扱いだから、なかなか使用許可が出なかつた。私はちなみに他国から留学中の貴族の設定。この国がどんなに安全そうに見えて、誘拐や暗殺なんかはもちろんある。異界から来たことは、その知識などが悪用される可能性があるため、近しい人を覗いて秘密。

「こわあー

ミリアがテーブルにお茶を優雅な所作で置く。朝ご飯にハーブティーと数種類のジャムやハチミツを付けて食べるビスコッティ、そしてたくさんのフルーツが用意された。

思わず呟いてしまつたけどスミスさん曰く、狙われるのはあたりまえのことらしい。特に女で殿下たちと関わつていると何かと物騒だそう。

「大丈夫ですわ！私も命を賭けてお守り致しますし、何より殿下たちがそんなことさせない筈ですもの」

うふふ、と笑うミリアは今日もかわいらしい。でも命までつて余計リアルに感じて恐いよ・・・

「女の争いは恐ろしいですからねえ」

と、対面に座り遠くを見つめ話し続ける爽やかイケメンスミスさんは、何かしら巻き込まれたことがあるんだろう……。

今日は1日お休みの日。

エリック君は私が休みだと知り部屋に遊びに来ようとしたが、異界渡りの無断欠席や罰のせいでいまだなかなか学校から出させてもらえないらしい。なのに私の部屋やお茶に来ていた、つまり学校をぬけだしていたということ。「真由子さんと一緒にお茶したいんだもん」なんて、下から上遣いされても惑わされないようにしなきや。

あと、ヘンタイ殿下は最近見ないと思つたら、他国へ数週間出掛けていたらしい。昨日戻つてきたつてミリアが（なぜか）教えてくれた。殿下となると外交事情もまた大変そうだ。どうせ女といちゃこらしてるんだろう。本当に女の敵だ。人が寝てる間にあんなに所有印をつけるくらいだからね！ 考えたらイライラしてきた。一生猫の社長でいればいいのに！

これから久しぶりに何かご飯を作ろうと思つ。まずは栄養管理から調理をしている宫廷料理人たちが働く調理場を見学しに、ミリアとスミスさんを引き連れて行つた。見学の旨は事前に伝えてあつたようだ、スミスさんが調理場の中に入り少しすると、バーン！とい

う勢いでドアが開け放たれた。田の前には50代くらいのいかにもコックという厳ついひげ面のおじさんが立っていた。じつと見られている。な、なんだうつ。

「お前さんが異界渡りの。オルベ……」「料理長！その噂は厳禁です！」

大声を出したスミスさんが慌てて私とハンスと呼ばれたコックの間に立ち睨み合ひ。

「あの腹黒エリック……」「調理場が消し炭になつてもいいんですか！」

再度大声のスミスさん。ん？何だ？ハンスさんは異界渡りのことを見らされてる1人なんだな、と考えつつ一連の出来事にポカんとしてしまつたが慌てて、

「本日は見学の許可をいただきありがとうございます。私は片岡真由子といいます」

「いや、いらっしゃりこんなべっぴんさんに挨拶をせつまない。俺はここで宫廷料理人の長をしてる。ハンスって呼んでくれ」豪快な身振り手振りでガハハと笑い、私の肩が陥没するぐらいで勢いでバシバシ叩かれる。い、痛い。

はあーこれはあの噂も本当かもなあ……など腕を組み静かに咳いでいる。

「ハンス様、本日は真由子様に調理場と、出来れば『畑』の案内をお願いしたいのですがよろしいでしょうか。異界とは全く違う栽培方法などに興味を持たれたようなので」

私の後ろに控えていたミリアが膝を折った。そう、ぜひ『畑』を見てみたいのだ。本で読んだので知識はあるものの、わくわくが止まらない！

「そうなのか？じゃあぜひ行ってみよう。きっと彼らもお前さんを気にいるだろう。しかし話には聞いてるけど料理が絶品らしいなア」

顎をなでながら面白そうに目を輝かせている。恐らくエリック君あたりからの情報が流れたのだろうが、料理長みたいな偉い人にそう言われると思わず照れてしまう。

「いえ、そんな・・・。私が作ったのは日本での家庭料理です」

「二ホン？ああ、異界か。エリック様から向こうでの話を少しだけ聞いたが、実に面白い！ぜひその料理たちを教えてくれ。味を追求するのが料理人の仕事だからな」

ガハハッと豪快に笑うハンスさんからは、この城で食べた纖細な料理は想像ができない。焼き肉！って感じだ。でも親しみが持てる人柄なんだろうということは分かる。

つまり食いにくるエリック君をいつも追いかけたり、面倒くさがりあまり食事をしないオルベルト殿下を叱るのも仕事らしい。昔からの王室専属料理人の家系で育つたため、この城ではかなり馴染みが深いようだ。

日本のレストランと変わらないけど桁違いにでかい調理場の見学をざつと終え、『煙』へ行く途中に色々な話をした。この国、そしてこの世界には調味料が少ないと思ったことを伝えると、輸入するよりも自国で生産される方がいいから、異界にある調味料をぜひ作つてほしい、という話になつたので醤油や味噌など作りと想つ。大豆あるかな？

日本での食について根掘り葉掘り聞かれたが、ガスでわざわざ火をつけたり、デパートやスーパーでは水槽の中で魚が泳いでいるっていう話にはとても驚いていた様子。魚が泳ぐのを見ることはあまりないらしい。それはこれから見る光景のせいなのだ。

*

「うわあああーーーこれが『煙』なんですねー！」

田の前に広がるのは、大きな木がたくさん植えられている森。しかも区画整理されていてその木にはそれぞれピーマンやニンジンがぶらさがってる。パイナップルが重そうに枝をしならせてるのはなんだか支えてあげたくなるなあ。

「ここは煙の入り口の『縁煙』だ。主に野菜や果物が生える。奥には魚の『青煙』や肉の『赤煙』、薬草の『黒灰煙』など何十もの煙があるぞ。おーあそこを見てみろ」

ハンスさんが指さすほうれん草の木の根元には猫がたくさん集まつていた。

「みやううーんーにゃ」

木の上から声が聞こえる。

「みゅー。みゅうみゅ、みゅみゅー」

「なん。なーん。んなつ」

田や薄ピンクや群青など色とつどこの猫が、木の幹にむつたり生えているほうれん草をキャッチしようと待ち構えている。ポトリ、と芝生の上に落とされたほうれん草を口にくわえ、大きな木で編まれた力方にどんどん積み込んでゆく。

なんと、猫が城の調理場まで食材を届けてくれるのだ！事前に必要な物を言つておくと、すぐに届けてくれたり指定した時間帯に運んでくれることもある。何となべザの宅配サービスを思い浮かべてしまつたのはほじ愛嬌。

しかし、かわいすきるーそれに広大な食材の森をタタタタツと小さな身体で駆け回るなんて働き者だ。

「木に生える食材を俺らの元に届けるのが彼らの仕事を。人見知りで臆病で少し恐がりだが、長く付き合つてみるとなかなかいい奴らだぞ」

私たちから少し離れた所から腕組みして彼らを見るハンスさんはまたガハハと笑つた。

「にゃーーー」

その大声に気付いたのか猫たちが一斉に動きを止めにゅかりを見つめてきた。

私と目が合つた灰色の猫が、尻尾をピンチと立てたままゆっくりこっちへ近づいてきた。他の猫たちは木の下で訝しげに私たちを見つめている。その時、後ろで控えていたミリアが小さな声で囁いて私の左腕をそつと引き寄せた。

「ここにいる猫たちはとても人に敏感です。ハンスさまや他数人を覗いては慣れていないので攻撃される可能性があります」

「え？ でもこんなにかわいいのに」

後ろへひつぱりつとするミリアや、斜め前で私を守りつとするスマスさんが理解できずにいた。文献にも攻撃するなんて書いていなかつたし、猫が攻撃なんて考えられない。何よりなでなでしたい。今の気分は、ほぼ部屋と中庭のみの監禁生活サラバ！ 私に癒しを！ って感じだ。

「後ろへ下がつてください。ハンス殿も彼らをなんとかして下さい」「俺がいるしそいつら特に何もしないと思つけどなあ。何より普段は見かけない人がいると、真っ先に攻撃するはずだぜ」

ハンスさんは相変わらず腕を組んで知らん顔をしたまんま少し離れた所からこちらを眺めている。私とミリアを左腕で後方へ誘導し、反対の腕で腰に差した立派な剣まで抜こうとするスマスさんに慌てて制止の声をかけた。

「ま、まつて！ さすがに猫に剣はないんじゃない？」

「ここにいる猫たちは少し事情が違います。城の食材を管理する猫なので、部外者を攻撃するよう訓練されています」

「でも、そんな雰囲気じゃないよ~ビー」からどう見ても人懷っこな
うな顔をしてるよう見えてるけど . . . 」

灰色の猫の翡翠色の瞳が近づいてくる。私がスミスさんの前にス
ルっと出でしゃがみ込むと、後ろから「真由子様」ヒスミスさん
とミコアの声が同時に響いた。

「 」

猫が喉を「ロロロロ」と鳴らし、差し出した手に頬ずりしてくれる。
「ね? そんなことないでしょ? 」

啞然として後ろにいる2人を振り返りながらでしていると、さら
に向こうでこちらを眺めていた数匹の猫たちが駆け寄ってきて、足
や手に絡み付いてくる。あつたかくつて柔らかいーー！

「みやー、みやー」

「ぶふつ、ぶにゃん」

「なうう」

「へえ、じつや俺でもこんなことにはならないな」

ハンスさんが脚を交差させて壁にもたれながら顔を細めている。

「い、一体どうこう」とじょり、猫たちが皿の邊つていいくなんて

「 . . . 」

「俺も城の猫たちが擦り寄るなんて光景、見た事ないです」

奇妙な出来事に何とも言えずただ驚いている2人。この『烟』に忍び込んだ何人かは彼らの火炎の攻撃をくらい医務室に運ばれたと。いう噂も聞いていたので、スミスはこの異常事態に順応出来ていな。ミリアもまた、誤つて迷い込んだ見習い侍女などが引っ搔かれたことなどを耳にするので同じ反応を示した。

「んなう」

小さな水色の子猫が背中にしょってある籠の中の林檎をポトリと落とし、両手でタシタシッと差し出してきた。林檎も小さくてかわいい。どうやら、つてことみたい。

「わーありがと。後で他の畠も案内してね」

「「「【】もん！」」

擦り寄ってきた猫たちが声を揃えうなずいてくれた。

畠の木（後書き）

更新遅くなり申し訳ありません。お待たせしました。

カラフルなこやんこ達です。でもショッキングな色とかじやなく、優しい色合いの猫です。

猫たちのボスはエメラルドのような濃緑色の猫だった。

「まゆいじやま、げんざこ」の地区的木はけんきゅうつかうなのでし。びょいきなどに負けなことつよい木にしゅるんでぢゅ」

威厳の欠片もないかわいい語り言葉だけど。

*

あの後、ハンスさんが急遽仕事の都合で調理場へ戻らなければならなくなつた代わりに、魔力が一番強かつたこの子が言葉が喋れるとあって私の案内役をかつて出てくれた。いつもはボスとして人間との交渉役をしていくようで、今は私の為に特別休憩時間中。ハンスさんがいなくなつて、今日は野菜が見れて満足して帰ろうつかと小さな甘い林檎をかじつていたら、すごい速さで小松菜が生えてる木から降りてきたもんね。「わたくちがあんないちましゅ……」つて金色の目を輝かせながら。

「こ」の庭にしゃべる猫がいるなんて聞いたことがないですね。意思疎通が出来ないからこそ問答無用で襲つてくるとしか聞いていませんでしたし……」

スマスさんはこの猫を知っていたのか驚いてはいないが少し物珍しそうに眺めていた。ミリアは侍女服のワンピースが草につかないよう片手で優雅に裾を持ち上げ、急展開についていくてない2人は

私のすぐ後ろをゆっくりとつっこいていた。

「襲つてくるつて物騒な . . . こんなにいい子たちなのに。それにこんなことでビックリしてたら私の劇的な変化は米粒みたいなものね」

でもビックリには私はもう慣れちゃったかな、異界渡りで魔術だつたり色々と順応していかなきゃやつてけないしね。パニックになる年齢や性格じゃないしさ。

*

ゆっくりと短い草が生えているプチ草原を歩く。

現在いるのは野菜の『縁畠』のとなりにある肉の畠。通称『赤畠』。

なんとその森 자체が巨大なシャボン玉に包まれている印象だ。羊や牛が木に囲まれた草原で、飯を食べていたし、小さな噴水がある水場にはアヒルなどもいて「ガアガア」と行進しつつ大合唱していた。これぞ、ザ田舎！って感じでいいなあ。生態系がしつかり出来てそうだし。まあこの世界の生態系なんか知らないけどさ。

「研究中なの？ へえーこの世界にも品種改良みたいなものもあるんだ。あ、ここにも見張りがいるのね」

田の前のエメラルド色の猫に話しかけ周囲を見渡していると、野菜の畠でもいたうろうろとしている見張り役の猫たちがタタタタッと駆けてきた。「危ないです！」っと私を後ろに引っ張りながら小さく悲鳴をあげるミリア、スミスさんは私を守るように前へ身体を

滑らせた。ホントなんで怯えるのかよくわからなー。私の頭の中で、猫が襲つてくるなんてありえないし攻撃つてこつてもひっかいたりやパンチだと信じていた。

「――あー。さーひつ さーひつ さー。みやうー

「――んなふんッー。」

「んじせ。なうーみせん」

すかねず私たちの前にいた案内役「ヤンコ」が命令口調で指示し、何かやり取りをしてくる。少しして「ひへじゅうがなー」とこつた顔でトコトコ歩こてきた。

「あの・・・」の子たちがまゆりめめあこれつをしたこと言つてこゐのですが、いいでしゅか?」

ええもひるんー。首をかしげてからおねだりとこつあまつの可憐なこつそ、とひなずく。

つてギヤアアアーーー!

猫たち一小さな鴨を追こ回さなこでー新鮮ですつて感じの誇りしげな顔で血みどりの鴨をくわえながら持つてこなこでーーー

――*――*――

「次のくこあは魚の『青鯛』でしゅ。」「くせ子猫は入る」とさであまひだん「ゆうわくとまけやうから、とトコトコの顔の顔を歩き

ながらしつぽをゆりゅう。

慣れない野生の狩りなどの衝撃からグツタリしつつ、私の後ろをまだ少しひくびくしてくるミリアと、剣をいつでも抜ける状態でいるスミスさんが追っている。ちなみにその後ろからはまたまた数匹の猫がついてきた。現代の人間からすれば軽く仮装行列みたいに見えるんだろうな。ちなみに私が恐怖のあまり手に出来なかつた鴨ちやんは今田の夕食に出されそう。

たまに子猫が「にゃーん」「んなっ、んなんなあっ」とつて足下にすりよつてぐるのを、『テレッ』とじつつかわしながらゆづくと歩く。

「おー鮭の木発見」

細い糸で吊らされたシャボン玉のよつた泡の中に丸々一匹が浮いて泳いでいる。その隣りの小さな泡の中には、プリプリとした鮭の切り身が包まれていた。

「ちやけはわたくたちのだいこづぶつなんでしゅー」

しかし生きた魚の隣りに切り身つてこの幻想的な光景にはシユールな感じがする。

「先ほども猫が言いましたが、もちろん本来は川や草原にいますよ。魔術でこんな風に出来るのは城だからです。城まで運ばれる際に毒が混入されることなどは多々ありますからね」

ミリアの斜め前を歩いてくるスミスさんが、田を凝らして観察している私にこじりやかに話しかけた。

すると後ろから「このなわばりで知つたかぶりするな」という風にシャーッ！と威嚇音が響く。私の前を歩く猫はしらんぶり。一方スミスさんは猫たちの攻撃に備えいつも剣を抜けるような体勢で睨んでいた。まったく猫相手について、少しあきれてしまつ。

「スミスさん、剣はダメですって剣は一何より、見学の許可は取つているから安全は保証されるはずでしょ？」

普段は不可侵の撻でもあるかのようにこの畠は守られているのだ。

「まあそうなのですがね・・・」

「真由子様。ここは噂が本当ならば妥当なことだと思ひますわ」

「噂？」

先ほどまで私と同じく、なかなか入れないという畠の木を怯えつも珍しそうに眺めていたミリアがつぶやいた一言に首を傾げる。ちらりと田線を向けたスミスさんもこっちをみて頷いている。

「ええ、あまり知られてはいないのですが実は・・・」

「フーッ！」

「きやつ」

ミリアが話そうとした瞬間、後ろからついてきていたオレンジ色の猫が飛びかかってきた。スミスさんが即座にミリアとミリアの側にいた私の腕を掴み自分の後ろへ追いやる。そして左手で剣を抜く。あまりの早業に制止をせることが出来ない。

「スミ・・・」

次に起こってしまった惨劇を想像し、ぎゅっと皿をきつと閉じてしまった。その時、後ろから声が聞こえた。

「久しぶりに来てみれば一体何をやつてるんだお前は

頭の上にポンと何かが置かれ、ふわりと後ろから風が吹き髪が揺れた。一瞬のことによくわからなかつたけれど、空気が変わったのだけは分かる。皿をそつと開けると、飛びかかってきた猫は分厚いシャボン玉のようなものに包まれ宙に浮いていた。そのフワフワした球は剣を受け止めグーヤリと形を変えている。

よ、よかつた……思わずほつと息をついて肩から力を抜くと、斜め後ろにいたヤツの「くつ」と笑いをかみ殺した声が聞こえた。髪の感触を確かめるようになでなでしている手は外して欲しいんだけど！ だけど一般ピーポーな私は腰が抜けそうになつていて声が出ない。両手を胸の前で握つたまま、思わず背後にもたれかかつてしまつた。

「オ、オルベルト殿下！」

隣りにいたミリアは慌てて私たちから離れ礼としてスカートを持つて腰を浅く折る。その向こうからはスミスさんが忌々しいものでも見るよつに長剣を見ながら歩いてきた。

「お願いですから、俺の愛する剣のために気をつけて下さいよ」「全く自分がかまえなかつたからつてなにかと嫌味なことしてくるんですからこの兄弟……」

何かブツクサ咳きながら近くにきたので剣をよく見てみると、その刃にはべつちょうした水飴のようなものが付着していた。先ほど

の姿勢から手を前に組んだ直立不動のミリアは青ざめ表情を固くしていた。

「で、殿下。このたびは申し訳ございません。わたくしめの不注意でこのようのこと……」

「次はないと思え。だが今日は色々と特例であり仕方がない。それ」「どうしてこのような事態になつたかはエウが伝えてきた」

「まあ今日は俺がいましたし大事になることはなかつたと思しますよ。それにこここの猫について詳しく知つてるのはごく少数ですし」スミスさんはフキフキし終わつた剣を黒い鞘に戻しながら、あつけらかんとした口調でそう言つた。

「エウ?」

ミリアへの言こと草に少し不満を覚えたが、新たな名前の対象が分からずには首をかしげてその整つた顔を見上げる。お、ようやく動けるし声出るようになつた。しかし陽の光の中でも相変わらず輝いてるな、サラッサラの髪と少しだけいじわるそうな紫の瞳は。

「……あの猫だ」

私と目線がパチッと合つとしばらく無表情のまま頭の上に乗つていた大きな手で髪をくしゃりとかき混ぜた後、親指で後ろを指さした。

あーあの猫エウっていうんだ。そう思い振り返つてみると真つ二つに割れたシャボン玉から出てきたオレンジ色の猫とエウが一步前に出て、そして後方には数匹の猫が横一列に並び頭を垂れていた。

「おぬべぬとひや。先ほびのことはわたくちのかんとくふぬあと
じきでしゅ。もつりわけありましょん」

その言葉に小さくなつてゐるオレンジ色の猫がブルリと震えた氣
がした。

「もういい。今後はきちんとそいつを見張れ。今日はもう各自持ち
場へ戻れ」

「はい。きょうはこれでしつれにいたしました。また何がござれこま
したらすぐにおよびくだちやい」

命令しなれた口調の殿下は、片手を振つて猫たちをフッと消した。

「ちょっと、殿下。他国から帰つてきて早々にセクハラですか?」
だつて私の腰には殿下の左手がずっとまわつたままだつたんだか
ら。もたれかかった時からね。

どうしてこの一国の王子様はいちいちカンの触ることをやつてくれ
るのだろう。 正直調子が狂うんだよな。かつこい
出来るオソナ風の壁がつまく作れないとこいつか。

「なんだせくはらとは? ああ茶を入れてくれ。それから調理場へ行
つて何か軽食を。スマスは念のためついて行け」

「かしこまつました。すぐこ

「はい。真由子様気をつけて下さいね」

何に気をつけるのかはわからないがスマスさんことりあえず頷く
と、2人は小走りで調達しに行つた。きっともうすぐこの猫たち
がこの森を走り回るのだろう。このお茶の合間にさつきの猫たちや

ヒウの話も聞けたら聞こづ。噂つて気になるし。

セクハラの意味を尋ねておいてわかつたのか興味が失せたのか、噴水があり畠の森が見渡せるならかな丘の上へ連れていかれた。その間何とか両手で腰にまわされた悪の触手を払おうとするが、細く見えるような腕は思ったより力強くがつちりと絡み付いているようだ。

殿下がスッと右手を軽く振ると、薦など植物の彫刻が彫られたテーブルとイスが2つ現れた。腰を掴まれたままイスまで連れていかれたので「いい加減にしろ」と上を見上げると、座るよう視線が訴えてきた。最初はものすごく紳士だった気がするんだけどな。

「お久しぶりです。昨日のいつごろお帰りになられたなんですか?」ゆっくつとイスに腰掛けると、向かいにお疲れの殿下がドカリと座る。

「昼過ぎだ」

「今回出向いた隣国はサルベニアでしたよね?炭鉱とシルク、そして纖細な織物で有名な。それでえつと、国王は最近ご結婚されたイリアス様は確かオルベルト殿下と年齢が近くて . . . 」

「うーん、と脳みそフルスロットルで隣国についてここ数週間で身につけたことを話す。

自分の今後の生活の為にと思って知恵をつけた。でももともと殿下やエリック君にも知識をつけるように言われていたので頑張ったのだ。いくら異界に飛ばした責任とはいえ、見知らぬ土地でまともな生活をさせてくれるパトロンだしね。

「ほあ . . . 墮落してはいないようだな。あの国は素晴らしいが

王は相変わらずバカなふざけもので子供のようだ。それに……

「やうやくて淡々とその国で出来た話をしてきた。

「いくら快適ライフだからって墮落はしないよ失礼な。まあ感心してみてくるのは嬉しい。しかしあんさん、腕を組んで偉そうに言うけどセクハラもふざけすぎだよ。

しばらく隣国に関する話で盛り上がった。政治についてはよくわからなかつたが、その国民性は国のトップと似通つているものだと分かつた。なんでもその王に夜通し酒を飲まされたとか、スリアスより街は整つてはいないが民の商魂がすごいとか。

「話ながらだがふとたまに、骨格ががつちりとした男らしいその指はまぶたの上を軽く揉んでいる」とに氣付いた。

「あの、殿下がいな間にエリック君やサンドラ女史からあなたの激務の内容を少しだけ聞きました。昼夜問わず働き過ぎです。何かお手伝い出来ることでもあつたら言つて下さこ」

「今は忙しいだけだ」

少しむつとしたようだ。氣を使つたつもりだけど出しゃばりすぎたかな。

「それより何でお前は料理しないんだ?」

「あ、そつちか。料理を持つて来なかつたことに怒つてゐるのか? よほど日本の食事が食べたかったのね。」

「私は(殿下と違つて!) 凡庸なのでまず知識をつけるのにいっぱ

いいっぱいでした。一段落しましたし、調理場の許可はもらいましたので今日何か作ろうと思つていた所です。もちろん差し上げにいく予定でしたよ?」

「そうか。ならいい」

反則でしょう、いつもは不機嫌そうなその田元をアーモンド型に変化させる優しい笑みは、テーブルの上に組んでいた両手に視線を落とす。

「じゃあ今日の夕食を作ってくれ」

「わかりました。一国の王族の方の食事ですし、ハンスさんとまた相談させてもらつてからにしますね」

イチオウね。

「ああ、それはいい。上には俺から語つておくれから好きにじぶ。それからこれはお前にだ」

そう言つてテーブルの上に右手を軽くかざすと、1m四方の白く大きな箱が私の目の前に現れた。箱には小さな金色の飾りがいくつもあつて見るからに高級品だとわかる。

「え?」

贈り物?なぜ?前にもドレスとか貰つたんだけど。ちなみにその宝石やドレスは「いらない」と返した。が、また返されて今はく一口ゼットの奥にしまわれてある。直径5cmの宝石がついたネックレスや黄金に輝くブレスレット、背中が大きくあいた真っ赤なドレスなんて着れないよ!

今回はなんだろうと田をパチクリさせて箱を観察してしまつ。一方、殿下はテーブルに肘をつき組んだ指の上に顎をのせつつそんな

私を観察していた、ことを私は知らない。

「サルベニアの糸や布は上質だからな。先日返品されそうになつたドレスなどはともかく、これらの土産は真由子の好みだと思つが?」

「お土産……。てゆうかこんなとせに以前で呼ばないで下を
い。何か裏があるのか疑つてしまいます」

「お前呼はねりたつたの？」私はしぶかしくに顔を上げると、静かに目が合つた。名前を呼ばれたのは2度目、こつちにきてははじめてなんじやないだろうか。そして相手は相変わらず微笑のまま呟く。

「裏、な。どんな人間にもそんなもの存在するぞ。今回は取引きだな。俺の名前を「オル」と呼べ」

—オル？？

少し眉を寄せて首を傾げる。それって私なんかが呼んでいいものなんだろうか。名前を呼ぶからこれくれるってこと？

「ああ。早く開けてみる」

爽やかに髪をなびかせている殿下は顎をクイッと箱へ動かした。名前呼び云々はともかくこの箱の中身はすごく気になつた。そつと金色のリボンをほどき蓋を開け、カサカサとしたものに包まれている紙を剥ぐ。

「ちょ！ す」「い！ きれ——い！ なにこのシルクみたいな柔らかい布！ 私も持つてなかつた！ 買えないよこんな高そうなの！」
ああああーもつす」「い。 レースも綺麗！ あ、花の刺繡のもある！

テンションMAXな私が手にしているのは・・・・・下着。箱

の中には真っ白なものからシャンパン「ゴールド」や「シードナイトブルー」、ベージュピンクなどのものにレースや刺繡がほどこされたあるブラやショーツ、そしてロングキャミソールが何着も入っていた。

実はわたくし、フランス製のランジェリーが好きで密かにインターネットで購入していたのだ。

日本の小悪魔とかセクシーとかブリーフりなものや逆に下品に見えてしまったうなものは苦手。その点、フランスのものだといやらしさを感じず、品良くセクシーにみえる気がしてボーナスが出た際はワクワクして購入ボタンを押すのだ。しまいにはフランスへ行ってしまうこともあった。誰にも理解されなくてもいい！私の秘密だつたんだから！

そう、秘密・・・ひ、みつ？

ハツとして前を見る。

「な、なんで・・・」

「俺の名は、社長、だったよな。異界では」

今まで優しい笑みだったのに、片方の脣を上げニヤリという笑いに変化した。ゆっくりと顔をのせていた両腕を解き、左の肘はついたままで右手の指でテーブルをトントンとたたく。

そう、猫のあなたの名前は社長。だって私がつけたんだから。つまり異界では猫として接してきたわけで。

フランスランジェリーの雑誌をテーブルに置きっぱなしだったし、私は下着で部屋をうろついたり、社長をお風呂に入れたり、うろうろしたりギュッてしたりうわづらしたりお風呂に・・・。

「 もや――――――――――！」

私は田の前にいる男をお風呂に入れたり下着姿でも抱っこしたりしたんだ！！破廉恥な！私！

思いつきり下を向いて下着を手に持った両手で顔を隠す。穴を！誰か穴を掘つて下さい！for me！過去を思い出し完全にパニック氣味になる。

エリック君とかまほこはなぜか同一のものだと理解は出来てた。でも社長と殿下を同一として意識しなかつた。なんでだろう。なんで！恥ずかしい！ああ――

・・・・・チラリ。

なんで今度はそんな優しい田になつてんのよ！お風呂で裸を見たからつてなによ！猫だつたことなんか知らなかつたから不可抗力！

それに、そんな恋人へのサプライズが成功したような顔しないで！

*

「 今、彼らは他人からどう見られているのか自覚した方が良いですよね」

「ええ。完全にイチャついているようにしかみえませんわ ！」

軽食を持っているミコアは片手をギュッと胸の前で拳を握りしめて頬を染め「真由子様かわいい！」と呟き、食器やお茶などを抱えるスミスは上からその笑顔を見つづ「そんなあなたがかわいいのに」

とため息とともに呟いた。もちろんミツアは「どうしましょ、今いくべきでしょ、」など興奮状態で聞こえるわけもない。

*

「ねー。何か寒気しない?」

その頃、魔術学校ではなぜか風が吹き荒れたといつ・・・・・

お土産ダーリン（後書き）

お久しぶりです。読んで下さりありがとうございました。

諸事情でこの作品をちよこいつと編集しようと思つております。
詳しくは活動報告に書いてあります、読まなくてもダイジョウブ
イな内容かもしれませぬので：

今更流れなどを変えるのは読んで下さる方に失礼と考えましたので、
あまり編集はしません。むしろ全然変わってないと思います。
編集した話のタイトル後には（改稿）といれています。もし「どこ
が違うんだ？」と気になつた奇特な、いえ、興味のある方は読まれ
てみて下さい。*

それから今後アップがスローペースになります。すみません（…）
でも本編もですが小話など書いていくのでまたたまにでも目を通し
ていただけたら嬉しいです。ピヨンピヨンします！

小話1（前書き）

なかなか更新出来ない状況が続いて・・・すみません（・・・）
なので今回は活動報告に掲載していた感謝小話3話と、ふらはある
ふあ小話「悪魔と天使」です。続きの更新はもう少し先になります
が、お待ちいただけると嬉しいです。

小話1

――――* 黒猫のお風呂*――――

現在、真っ黒子猫ちゃんはおとなしく私の脚の間で泡につままれている。今は背中や手を洗つてあげている。嫌がるかな、と思つてこたけれど相変わらずトロ～ンとしてるみたい。

「猫～この石鹼のにおいしい香りでしょ？」

「んみゅ」

浴室にはローズマリー、レモンバームやオリーブなどブレンズされたハーブの優しい香りが漂つてゐる。キツい香りではない上に自然派無添加なので、これは動物にもいけると判断し猫を泡だらけにした。う～む、だいぶ汚れているな。

じぱり～して真由子は「み～」とつぶやき猫をこちり側へ向かい合つように回した。すると猫はピックリして何だかおちつかなく視線をうつし始めた後、またおとなしくなった。

なんだかうつと思いつつもお腹を洗おうとしたが、真由子はあることに気付き猫を抱き上げた。

「あ、男の子なんだね、にゃん～様は」

真由子は猫の下半身辺りを見ていた。

猫は胴体をぶら下げ、耳をぱつちりと見開き少しだけ舌が出ている状態で固まつた。まるで見習い魔女と赤いリボンの黒猫が出る某有名アニメ映画のぬいぐるみだ。

お腹を洗いだすと猫は覚醒したみたいだが、なぜだか肉球で胸のあたりをむにむにと触つてきた。たまに触れられたりたかれたりするとくすぐつたいとこも触られたけど、子猫のお遊びとして放つておつか「うおう、やめなさい」と軽く払いのける程度にしておいた。

真由子は猫の泡を洗い流して洗面器にはつたお湯の中に入れて、今度は泡をたつぱりつけたスポンジで自分の身体を鼻歌まじりで洗い始めた。

…………その様子を猫がジーっと見ていたことを真由子はしらない…………

—————* 真由子に会つままで会つてからのかまぼ*————

*—

んみゅう…………いやうー（お腹減つた…………）

そこには馬小屋のような小さな小屋の隅つゝ。小さな子猫が鳴いて

いる。

異世界渡りをしてみたものの、人間の姿でうわづらしていたらケイサツカンという人達に捕まつて根掘り葉掘り聞かれそうになつた。何だあの無礼者たちは！ そう憤り彼らが目を離した一瞬で猫になり脱走した。

魔術は見つかつたら大変だ。まあそん時は相手が勝手に消えるから放つとけばいいけど。

なああう（寒い）

にやうん、うにやつ（いい加減帰るかなー。でもまだまだ）

あー温かい食事が食べたいなどとぼやいいると、うるさいと言われた。

怒鳴つた女の人の前に出てみたのはいいが何だか泣きそうな顔だ。ケイサツカンじゃないよな？ 少し警戒してしまう。その人は僕らの国では高級輸入品である魚の練り物「かまぼこ」を取り出した。ふむ。僕にくれるには悪くないチョイスだ。調理されてないのは猫だから大目に見よう。

どうやら真由子さんというらしいが美人に拾われてラッキー。だけどネーミングセンスはひどいもんだ。

仕事から帰つた真由子さんに「にやーん」と言つと「ご飯をくれる。城内でいつも食べている「食事」ではなく温かい「ご飯」。

ミルク粥、蒸し鶏や蒸し野菜、いろんなスープに白米をいれてくれるのが定番なんだけどどれも手作りで素朴な味がする。たまに真由子さんの皿から御馳走を盗む。猫だからこれはダメ！って怒られるけど僕人間だから大丈夫だしね。いつも甘えさせてくれるしたまに怒られる。

これなら、この人ならアイツも・・・

ある人物が浮かんだが、真由子さんがくれたジューシーな唐揚げに夢中になってしまった。でも真由子さんが食べてる香辛料の香るやつがいいな・・・。ジッと見てるとダメ！といつも通り怒られ耳が垂れてしまった。

一緒に眠ると熟睡出来るし変な名前だけどかまぼこと呼ばれるのも大好きになつた。でも真由子さんはたまに悲しそうな顔したり少し泣くんだ。僕はそんな時、静かに寝た振りをする。この存在だけは消したりしたくない・・・側にいたいから。

数日後、もう一匹の猫がやっぱりやって來た。きっとテレビとかのカデンセイヒンに驚いたり、真由子のお風呂や抱つこの洗礼を受けるであろうことを想像しニヤフツニヤフツと床を叩いて笑つてしまつた。

そんな僕を真由子さんが見て気味悪がつていた。ガーン

――*――* 電子レンジ*――*――*

餃子を作るにあたりひき肉をレンジで解凍する。

かまぼこは社長に「うにゅ、なふんつ」と話しかけブーン、と音をたてる冷蔵庫の上の電子レンジの前に連れてきた。何とも滑稽な光景だ。社長は不思議そうにまわるひき肉を見ていた。

あーあー二ヤニヤしてゐ。絶対にあの低レベルないたずらする気だ。

「チーン!—」

「!」

びつくうううううつ!

社長は軽く飛び上がり、紫の田は見開きシャンパンゴールドの毛はライオンの!とく逆立つてゐる。

「うんにゅにゅにゅにゅ」

笑う猫はすでに冷蔵庫から降りてソファへ向かつてゐる。まるで驚いている猫をバカにしたよつ。

しかし忘れる事なかれ。

かまぼこはレンジを初めて見た時に、高く飛び上がつただけでなく「んにゃあああ！」と叫びつつ冷蔵庫から転げ落ちかしかし床を蹴り、大ジャンプして私の胸に飛び込んでプルプル震えていたのだった・・・。

――――* 悪魔と天使*――――（書き下ろし）

俺は王立騎士団第4隊長、スミス。ちなみに、第3隊長はオルベルト殿下だが、現在は公務が忙しいから変わり者の副隊長が代行している。その副隊長つてのも個性的なんだよなー

殿下とは魔術学校からの知り合いだし殿下兄弟とは昔からまあ何かと縁があり仲が良いと思つ。うん。（注・実際はいじられているだけ）

そんなオルベルト殿下は謎の存在だ。

第3隊長の地位は公に対する肩書きにすぎないようみえる。つまり、国を短時間で動かすには肩書きが多く必要だと考えているのではないか。なら政治の重要なポジションへ就けばいいのに就かなまま、老いぼれ敏腕宰相の補助ばかりしている。（ちなみに宰相は国一番の個性的だと俺は思う・・・）

まあ薄々予測はついてはいるが、一体なぜそこまで、と思つ」と

もある。

*

「ホーー！」

ふわふわと何かが飛んできた。

本来なら植物の水やりに飛び回る手のひらサイズのジョウロクジラが、頭から水をまき散らしながら俺の頭の上に降り立ち口をパクパク開けながら伝言を伝える。

「スミス！いいもの見せてやる。すぐに来い」

頭から水を滴らせ、またか、という嫌な予感に肩を落とした。

「俺は植物じゃないのにジョウロクジラって。全く、何でもかんでも魔術を吹き込めるのは天才なのかバカなのか、ただの楽しみなんか何も考えていないのか……」

真由子様がこの国の知識をつめこんでいる間は、別の護衛が部屋の外で警護しているので比較的隊長として騎士団へ戻ることが多くあつた。そんな中、あの悪魔が伝書クジラを飛ばしてきたのだ。思わず下を向いて背中をポリポリと搔き歩き出す。

「どうせ絶対良いことじゃないな……」

その咳きはため息と共に、頭上のホーー！ホーー！という鳴き声にかき消されてしまった。

騎士宿舎から城の入り口の庭にさしかかった時、優しいアルトの声が響いた。

「あら？ じんにちは。 その格好はどうなされたのですか？」
風で周囲の花々がふんわりと揺れ、それと一緒に揺れる栗色の髪をした天使に俺は目を奪われた。慌ててキリッと氣を引き締めたのは男の見栄だ。

「どうも、ミリアさん。まあこの格好は……なんでもあります」

ほんと悲しき力ナ。見栄をはつた所で今の自分は濡れ鼠。水がしだたつてきて思わず手で髪をかき上げる。

「そうですか。困ったものですねえ」

水を全て吐き終わったのか、頭に偉そうに鎮座しているクジラ（追い払つても頭上に来る）を見て何でこんなことになつていいか分かつたかのようだ。口に小さな片手をあててクスクスと笑つていて。その揺れる華奢な身体を抱きしめてしまいたい衝動を拳を握りグッと押さえる。

「これどうれ。先ほど真由子様の部屋に飾る花をとつてきました。その時に包んでいたタオルなのですが、よければ使ってください。風邪ひっちゃいますよ？」

「え……？」

頭の上にいい香りの桃色の柔らかい布がかぶせられる。

面白そうに笑つているが少しだけ心配そうに下から覗き込んでくる天使に、興奮するなと言う方がおかしいだろう！ だつてずっと前から気になつっていたんだ！ しかしあまりの突然の接近に固まつてしまつた。ミリアさんは精一杯背伸びをして髪や肩など濡れている所

を拭き取つてくれていた。

少し下を向いていた俺の目に飛び込んできたのは、柔らかそうな首もとと胸元。慌てて現実に引っ張られる。

「もつ、もももう大丈夫ですからつー。」

動搖のあまり脱兎のごとく逃げてしまつた。その胸や腰を掴んで思いつきり上や下から・・・・なんて考えてしまつた自分に自己嫌悪。騎士としてあるまじきことだ！

何があつたのか分からずポカンとしているミリアは「？？不思議な人ねえ」と、のほほんと眩き抱えた花を抱き直し城へ入つて行つた。

城の中にいたヒリック様の元に行くと、すでにソファに前屈みぎみに座り田の前のテーブルに置かれた四角い物体をみていた。近づき何かと聞いてみると、それはどうやら異界の「てれび」というものらしい。内部はよくわからないから適當だが魔術を込めれば映像が映し出せるように技術者に作つてもらつたらしい。なにが面白いのかクククッと笑いながら侍女にお茶を頼んでいる。

「ヒリに座りなよ。異界でのあいつが見れるぞ」

「はあ。じゃあ失礼します。異界でつてことは真由子様の家に滞在

していった時のことですよね？」

「へ。傑作なんだこれが。魔術で変化した兄さんも珍しいけど、自分の隣り、てれびの画面が見えるような位置に促され腰を下ろす。そしてエリック様は侍女が運んできた飲み物を若干口がにやけたまま一口飲む。

「らしいですねえ。変化したんですねえ。あのオルベルト殿下が…

置こうとしていたカップがガチャンと音を立てた。

魔力が強い者は必要に応じ猫に変化することが出来る。ただ、好き好んで変化する者は少ない。面前のエリック様は遊びでよく猫になっているが、男だと変化した可愛らしい姿を見られたくないと感じるやつは多い。

「まあ見てのお楽しみ」

そう言つてれびのちゃんねるのボタンを手を押した。

するとブンシ、つと言つ音と共に真由子様と猫姿のエリック様が食事をとっている所が映つた。箱から映像や声が聞こえるという不思議な技術に目を丸くしてしまつ。

小さなテーブルの上には、牛肉と一インチンとタマネギとじやがいのシチュー、それとバケットとサラダが置いてあった。

『二やあー』

『あら、催促ホール？待つてねー。かまぼこ用に玉ねぎとかが入つ

てないの作ったから』

そう言って映像の中の真由子様は、食べやすいよう碎いた野菜入りシチューの小さい皿にバケットを入れふやかし、黒猫にそっと差し出した。その間もずっと黒猫は真由子様の足下でスリスリしていた。

『そ、どうも。バターと牛乳から作るシチューは手間がかかるけど美味しいのよね。おいしぃ』

はぐはぐ食べている猫に向かって屈託なくにっこりと笑う。

『んにゃふーふにゃー!』

皿に顔を突っ込んだまま、しつぽを振り猫は喜びをあらわにしてい

る。

「おつと、 Ireneじゃない。ちゃんねる操作はむずかしいな。これか
?」

そうぶつぶつ言つてエリック様は違つボタンを押したりしている。

猫に変化することを嫌がるオルベルト殿下の気持ちは分かるけど、ここまで猫にな引きつているエリック様は恥ずかしくないんだろうか? . . . 恥ずかしくないんだろうな。殿下だけど「殿下と呼ぶな!立場が相手にすぐバレるじゃないか!」つてくらいだし。

『きやーー暴れちゃだめ!』

『フーッ!..』

『かまぼこは見守つてくれてるだけなのに』

『「こやつふん』

てれびの画面には真由子様が浴室と思われる場所で泡だらけで水のせいでショボーンと小さくなつた成猫のオルベルト殿下を洗つていた。それを近くで眺めるかまぼこ、もといエリック様。

思わず「ブハッ！」と吹いてしまつた！

「笑いものだろ？あの兄さんが猫の姿で女に身体洗われてんだぞ」

「くつ、これがあの仕事人間で色男と噂されるオルベルト殿下の御姿！ダメだ……わ、笑いが、ギヤハハハ…す、すみません！でも笑い、がとま、り、ません！」

真由子様と向かい合つて拳動不審になる猫を観て、さらにソファの上で腹を抱えて爆笑してしまつた。

エリック様は「だらうだらう」と領き自分の撮つた映像に大満足して見入つていた。ある意味悪魔だ。

ちなみに真由子様の姿はエリック様の魔術により、よく見えないようになりもやが立ちこめていた。ううん、残念。俺的にもあるスレンダーで色白のプロポーションはグツとくるものがある。ま、やっぱり穏やかに笑う優しくつて肌も柔らかそうニアリアさんが一番だけどつ。

その後、朝起きて真由子様の胸元に收まりおだやかに眠る猫を観

てまた笑い、起きた猫が部屋の隅で若干恥ずかしそうにしている所でまた大爆笑スパイラルへ落ちた。

そしてしばらぐの間、オルベルト殿下をみるとこやけそつになつていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2015s/>

あなたとご飯と私

2011年7月2日18時24分発行